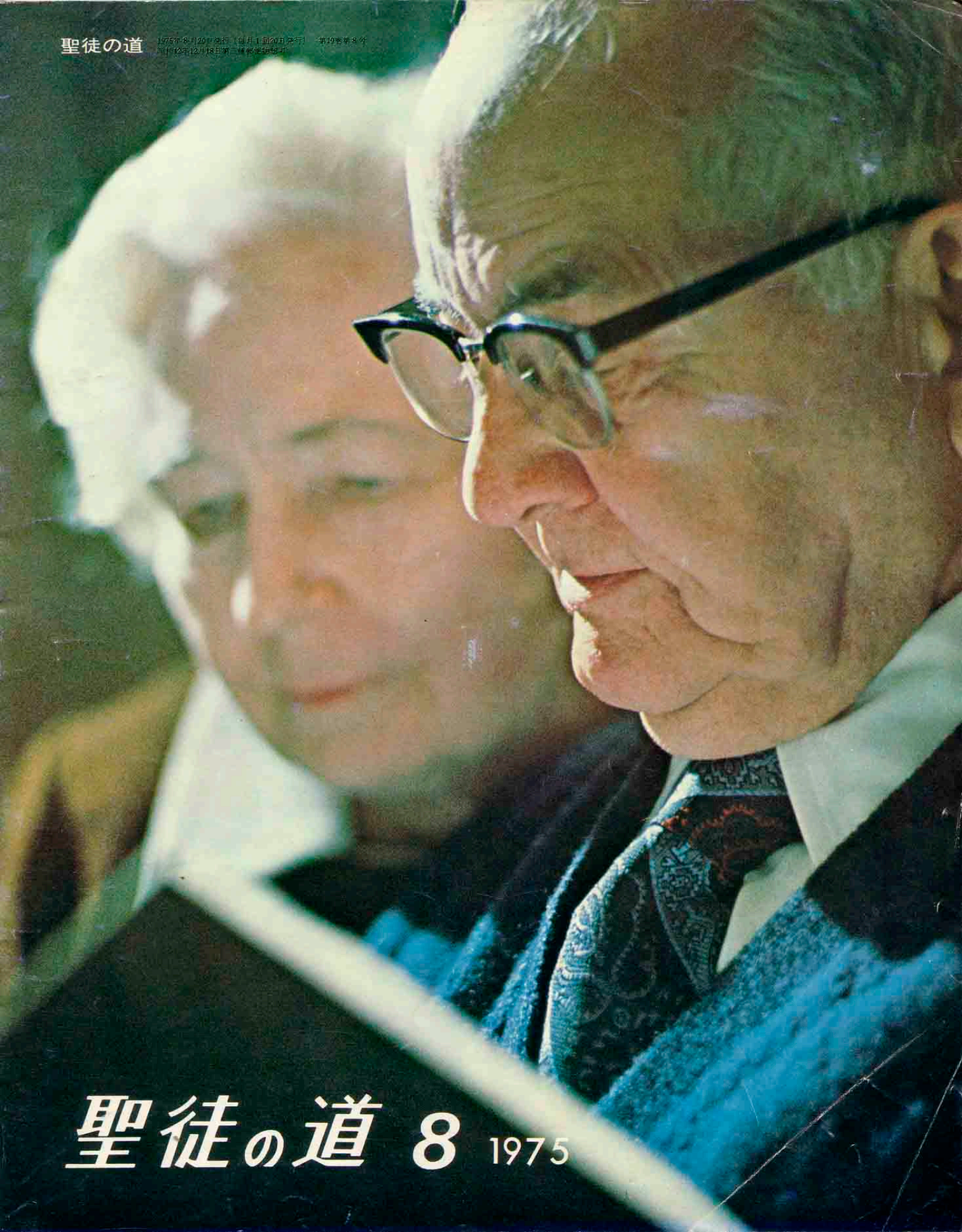
聖徒の道 1975年8月20日発行（毎月1回20日発行） 第19巻第8号
昭和42年12月18日第三種郵便物認可



聖徒の道 8 1975

羊飼いの声

何世紀もの間、聖地では、羊飼いが羊を集めて夜のうちに村に連れ帰り、柵や囲いの中に入れる習慣が続いている。これは便利と安全のために行なうことである。朝になると、羊飼いは、羊の群れのところへやってきて、羊を呼ぶ。すると羊は耳を立てて、その声を聞くのである。そして、それが確かに、自分の飼い手の声だと知ると、その声のする方へ移動して行く。他の群れの羊は、身動きもしない。しかし、その飼い手の羊は群れの間をすりぬけながら、彼のもとへ行くのである。そして全部集め終えると、丘の向こうへ連れて行き、草を食べさせる。このことから、私たちはヨハネ10：16の聖句を理解することができる。「わたしにはまた、この囲いにいない他の羊がある。わたしは彼らをも導かねばならない。彼らも、わたしの声に聞き従うであろう。そして、ついに一つの群れ、ひとりの羊飼となるであろう。」

ソルトレーク・フットヒルステーキ部
モニュメントパーク第8ワード部　ポール・L・ハーモン

8月号

もくじ

人生には目的がある……スペンサー・W・キンボール…338
1924年の迫害……トーマス・J・グリフィス…343
質疑応答……345
信仰を擁護して……セオドア・M・バートン…348
歌声は希望の光となって……コーリン・ヘンリックセン…351
日々の恵み……ヘレナ・ハンノネン…353
祖父の勇気……アスムント・ヘルネス…354
主の戒めは祝福をもたらす……ハートマン・レクター・ジュニア…355
あんそく日……スターリング・W・シル…357
小さなお友だちへ……O・レスリ・ストーン…358
こうふくの木……エバ・グレゴリー・デ・ピミェンテ…360
おもちゃばこ……363
狼の遠吠え……ウェンデル・J・アシュトン…365
モルモン経は神のみ言葉……エズラ・T・ベンソン…366
モルモニズムの真髄……ハートマン・レクター・ジュニア…369
アメリカにおけるキリスト……N・エルドン・タナー…372
「わたしを主よ、主よ、と呼びながら なぜわたしの言うことを行わないのか」……スペンサー・W・キンボール…375
復活祭に寄せて……マリオン・G・ロムニー…379
ローカル・ニュース……382

末日聖徒イエス・キリスト教会

大管長会

スペンサー・W・キンボール
N・エルドン・タナー
マリオン・G・ロムニー

十二使徒評議員会

エズラ・タフト・ベンソン
マーク・E・ピーターセン
デルバート・L・ステイプレー
リグランド・リチャーズ
ヒュー・B・ブラウン
ハワード・W・ハンター
ゴードン・B・ヒンクレー
トーマス・S・モンソン
ボイド・K・パッカー
マービン・J・アシュトン
ブルース・R・マッコンキー
L・トム・ペリー

諮問委員会

J・トーマス・ファイアンズ
（内務伝達部長）
ジョン・E・カー
（配送翻訳部長）
ドイル・L・グリーン
（教会誌編集主幹）
ダニエル・H・ラドロウ
（教会教課企画調整主任）

国際機関誌編集主幹

ラリー・ヒラー

日本語コーディネーター

八木沼　修一

聖徒の道 8月号

発行所　末日聖徒イエス・キリスト教会
東京都港区南麻布5－8－10
配　送　東京ディストリビューション・センター
東京都港区南麻布5－10－25
定　価　年間予約1,700円　1部 150円
海外予約2,200円

INTERNATIONAL MAGAZINE　Printed in Japan

大管長会メッセージ

人生には

大管長　スペンサー・W・キンボール

◇　　◇

「自分が価値ある存在であることを見出すのは容易である。なぜならそうした要素は私たちの中に数多くあるのだから。」

◇　　◇

末日聖徒イエス・キリスト教会が地上における神の王国であることを知っている者、その信仰を持っている者は、家庭でも、ビーハイブのクラスでも、執事定員会や、ヤングアダルトあるいはスペシャルインタレストの評議会であっても、どこででも自分のつとめをさらに立派に果たしたいと思うものである。しかし、神と人のことをないがしろにしては、せっかくの訓練も技術もたいして役には立たない。

奉仕のしかたを知るのは、実際に奉仕することによってである。私たちは隣人への奉仕に携わるとき、その行ないによって人を助けるばかりでなく、自分の問題を新たな視点から見つめることになる。人のために励むとき、自分のことを考える時間は少なくなる。奉仕の奇跡のまさしく中枢に、自分を無にすることで自分を発見するというイエスの約束が存在するのである。

私たちは人生の指針をみつけるという意味で自分を発見するだけでなく、適切な方法で隣人によく奉仕すればするほど、心に充実感を覚える。そして人に奉仕するときに、さらに意義ある存在者となるのである。私たちは人に奉仕するときにいっそうたくましくなる。事実、自分が価値ある存在であることを見出すのは容易である。なぜならそうした要素は私たちの中に数多くあるのだから。

ジョージ・マクドナルドは、「人と親しく心を交えるようになるのは、愛されることではなく、愛することによる」

目的がある

と言った。だれしもが愛されなければならないのは当然だが、しかし、健全な人生としっかりした目的意識を持ちたいと思ったら、いつも受けるだけではなく、与えていなければならない。

ときに、環境を変えるのではなく、環境に対する自分の態度を変えることが解決になることがある。また難局が奉仕の機会となることもしばしばである。「自己憐憫には地獄も凍りつく」と言われている。

ある教会幹部はこう述べている。

「注意を怠ると挫折の凍傷に冒されることがある。期待が達せられないという寒さのために、その場で凍えることがある。それを避けるには、ちょうど厳しい寒さのときにするように、絶えず働き、絶えず奉仕し、手を差し伸べて、静止が命取りにならないようにしなければならない。」

私たちは、奉仕しようとする相手の人に、神が彼を愛しておられ、彼のことを心にかけ、その必要を心に留めておられることを悟らせる必要がある。アロン神権の年齢の若いジョセフ・スミスに、全人類に対する教えを託そうと現われたもうた父なる神と御子イエス・キリストは、この地球上のだれかにただ当て推量で姿を現わされたのではなかった。主は、周到に計画されたその出来事を、「主なるわれ、この世に住める人々に襲い来るべき禍を知れば、わが僕ジョセフ・スミス（二代目）を呼び天より語りて彼に誡命を下せり」（教義と聖約１：17）と言っておられる。

神は何事をも、その場その場の思いつきではなく、常に愛の深い父として、目的をもって行なわれる。その目的は私たちの知るところであり、私たちもまた人生に目的を持っている。

人の不幸を防ごうとして戒めを与えられた、そのように愛の深い天父は、子供たち一人一人の必要を、決して忘れられないであろう。ウィリアム・ロウは次のように述べた。

「あなたがたの頭の毛までも、みな数えられている（ルカ12：７）と言われている。それは、何事もそれこそ想像の及ぶ限りの小さなことまで、私たちの身に起こることはすべて偶然ではない、ということではなかろうか。私たちに考えられる限りの小さなことまで神のみ手の下にあると言われているとすれば、誕生の様子や親がだれであるか、また誕生の時、あるいはそのときの環境、事情といった人生の大きな物事もみな永遠の目的や支配や神の摂理によっていることが、もっと容易にわかるのではなかろうか。」

神は私たちを認め、私たちを見守っておられる。しかし、神が私たちの必要に応えられるのは、普通の場合、別の人を通してである。それだからこそ、私たちが神の王国で互いに奉仕しあうことが大切なのである。教会員は、主の弟子の飛び地とも言うべき信者の社会の中で、お互いの力と支えと指導を必要としている。教義と聖約には、「弱きを扶け、垂れたる腕を挙げ、かよわきひざを強く」（教義と聖約81：５）することがいかに大切であるかが記されている。奉仕の行為が、ささやかな励ましやごく日常的な仕事の地味な助けであることは多い。だが、日常的な行為や、小さなしかし思いのこもった行ないから、何と素晴らしい結果が生まれることか。

世の道と神の道の対照がますますきわだつ状況にあって、教会員の信仰は、前にもまして厳しく試みられるであろう。私たちにできる最も大切なことのひとつは、奉仕することによって自分の証を示すことである。その奉仕は、霊的成長を生み、さらに奉仕の気持を確固たるものとし、戒めを守る能力を高めてくれる。

25年ほど前に、スティーブン・L・リチャーズ副管長は私たちを奮起させる言葉を語った。

「平凡でありきたりな事柄ではあるが、私は、人生で最も劇的で取り組みがいのある大切なことは、この『戒めを守る』ということだと、長い間考えてきた。これによって、自分の存在のすべてが試される。それは同時に英知や知識、性格、そして知恵の表明である。」

霊性には大きな安全が伴う。そして、その霊性は、奉仕なくしては得られないものである。

しかしながら、戒めを守っている人に奉仕するための励みとして必要なことは、新たに霊感や啓示を受けることではなく、むしろすでに知っている事柄をみたまによって呼び覚まさすという簡単なことである場合が多い。「記憶は霊魂の胃袋」と言われているが、私たちはその胃袋で真理を受け入れ、消化し、栄養とするのである。聖霊は私たちの理解と同様、記憶をも刺激する。従って私たちは、すでに正しいと知っていることは行なわなければならない。

簡単なこと、わかりやすいこと、具体的なことを私たち末日聖徒がふさわしく生活をして聖霊の感化を受け、常に聖霊を伴侶として導きを得なければならない理由は、ひとつにはそのためである。技術の体得は確かに役立つが、聖霊の導きは、それよりもはるかに大切である。

私たちが良い指導者となるためには、自分を助け、導き教えてくれた人々の持つ特質を折に触れて思い出すことである。自分の人生に最も感化を与えた人を２，３名選ぶとしよう。大事なとき、苦しいときに具体的にその人たちのどんな援助がありがたかったであろうか。しばし考えてみれば、その人は真心からあなたのことを心配し、あなたの

ために時間を取り、あなたにとって必要なことを教えてくれたことがわかるに違いない。今、自分の召しにあってそれと同じ根本的な特質を表わしているかどうか、自分を振り返ってみていただきたい。技術が優れていて特別に大きな影響を受けたからその人のことがいつまでも忘れられない、ということは少ないであろう。自分を愛し、理解してくれた、あるいは時間をとって自分を助けてくれた、または自ら模範となって道を示してくれたという人が、たいがい心に思い出されるのである。それだからこそ、昔私たちが頼りにした人たちと同じことを、今私たちを頼りとしている人々のために行なうことの大切さは、いくら強調しても足りないほどである。

もしも私たちが奉仕の単純な原則と単純な行ないに目を向けるならば、組織に固執する意識が薄れてゆくであろう。過去に、教会の組織の系列が壁となって、思うように個人的な援助のできないことがままあった。組織や個人の名目をさして気にかけなくなれば、自分が責任を持つ人への奉仕に関心がもっといくようになることにも、気づくであろう。さらに、組織そのものへの関心が今より薄れ、天父の息子、娘である私たちの本来の真実な姿が浮きぼりにされて、人々にも天父の子供だという同じ意識を抱かせようとしている自分を発見することであろう。

それに関連して、私たちは偉大な模範者イエス・キリストを忘れてはならない。イエスはニーファイ人の弟子たちに次のように教えられた。

「されば、汝らの光が輝きて世の中を照らすために、汝らの光を高くかかげよ。汝らが高くかかぐる光とは、すなわちわれなり。とりもなおさず汝らが見るわが行いなり。」（Ⅲニーファイ18：24）

イエスは続いて、ニーファイ人の群衆を近くに呼んで御自身の復活体を見せたりさわらせたりしたことについても話をされた。神聖さはそれこそ格段に違うが、熱心な指導者も、イエスがなさったように直接効果的な方法として、自分で奉仕しようとする人々に、イエス・キリストの福音の真実性と力とを「見せたり、触れさせたり」できるのである。

イエスが私たちの掲げようとしている光であることを考えてみるがよい。イエスを思い起こさせるものがどれほど私たちの前に示されていることか。末日聖徒イエス・キリスト教会という名称、聖餐の祝福、バプテスマの祈り、「イエス・キリストのみ名によって」という祈り方。イエスのみ名は非常に神聖なので、み名を使ったり引き合いに出したりするときには慎重でなければならないが、しかし私たちは長兄を偉大な模範として仰ぐべきである。なぜならば、この教会はイエスの教会であり、そのみ名をいただき、その福音を基としているからである。

こうして、私たちは自己本位の世の中から集まり来て、奉仕について語っている。傍観者は、大問題の山積する世の中で、私たちがそのように単純なことにかかわりあっているのをなぜかと思うかもしれない。だがイエス・キリストの福音のひとつの利点は、自分をはじめこの地上に住む人間に関して正しい見方を教えてくれることにある。それによって私たちは本当に大事なことを知り、あれこれと人の気をひく、さほど重要でないたくさんの物事に心を捕われなくてすむようになるのである。

私たちは、末の日の社会がノアの時代にあったようなしるしを幾つか呈すると聞いている。ノアの時代がどのようであったかを伝える言葉はごくわずかしかないが、民は明らかに神の戒めに不従順で、世は乱れ、社会に暴虐が渦巻いていた。（創世6：11）　暴力と腐敗は通常利己心から生じる。このような時代にあって、隣人への奉仕に心を向けることは、何とふさわしいことであろう。

今日戒めを守る人々は、ちょうどノアが洪水の来る前に箱舟を造るという、一見奇妙な行為によって世間からつまはじきされたように、世の中から分けへだてされるであろう。私たちが単純で日常的、世間的な奉仕を行なおうと努めるとき、そしてこの時代に神の戒めを守ろうとするとき、必ずや私たちは、ノアとその家族が大洪水の前に受けた、同じあざけりに出会うであろう。

ノアの隣人たちは、ノアの仕事が急を要することをただ理解できなかっただけである。私たちも他の多くの人々に、家族や純潔や伝道という単純な事柄に抱いている私たちの急迫感を理解するよう要求すべきではない。

教会には、結婚を一寸延ばしにする青年が大勢いる。ただぐずぐずしているだけの人も多い。責任のないひとり暮らしの方が気楽だと考える人もある。また思い通りの結婚をしたいと祈るだけで、別にそのための努力をしようとしない人もいる、そして、特に結婚するつもりのない「世間の人」の間には、結婚しなければどんなことも楽しめるし、独身生活の方がずっと気楽で責任も少ないと主張する人が、ますます多くなっている。

ここで兄弟たち全員に申し上げたい。結婚は神のみまえに誉れあるものである。私たちは、楽しんだり、物欲や名誉欲を満たしたり、自己本位の生活をして情欲を満たしたりすることを第一主義として地上に置かれたのではない。

主なる造り主はこう言われる。

「日の光栄には三種の天界、すなわち三種の階級あり。而してその最も高きものを得んために、人はこの神権の位（すなわち新しく且つ永遠の結婚誓約を言う）に入らざるべからず。人もし然せずんばそれを得ることを得ず。人は他の天界に入るを得べし。されど、そはすなわちその人の光栄の国の行き止りにして、また殖ゆること能わず。」（教義と聖約131：1－4）

「……汝らもしこの誓約を守らざるときは行き止りとなるべし。何人もすべてこの誓約を拒絶するを得て、而もわが光栄に入るを許さるる者あらざればなり。」（教義と聖約

132：4）

言い訳や合理化をどれだけしようと、これらの真理が無効になるとは思われない。

結婚には子供が付き物である。主はそのことも明確にしておられる。

妻は「その子孫の殖えて地を充さんため、……人々の霊を生まんがため……かくして御栄は父に在る」ために、夫に与えられている。（教義と聖約132：63）

このとおり、独身男性はだれひとり正当化をして言いのがれすることはできない。

一方、ふさわしく魅力的で教養があり、身じまりもきちんとして実に素晴らしい若い女性が大勢いる。彼女たちに申し上げるのだが、私たちはあなたに望み通りの夫をお世話はできない。これまで機会に恵まれなかった人は、自らを注意深く反省してみる必要がある。自分の習慣、話し方、外見、体重、また風変りな点があったらそれも。一つ一つを取り上げて分析してみなさい。何か努力をして、もっと受け入れられるようになれないだろうか。あなたがその判断をしなければならない。

あなたはおしゃべりの度が過ぎてはいないだろうか。引っ込み思案ではないだろうか。口数が少なすぎないだろうか。もしそうであったなら、考え方や話し方を修練しなさい。

住んでいる場所が悪くはないだろうか。新しい世界が開ける所に引越しはできないだろうか。

服装があまりに古くさかったり、派手であったり、極端すぎたりしてはいないだろうか。うるさすぎはしないだろうか。話し方や声の調子や話すことが突飛ではないだろうか。けたたましい笑い方ではないだろうか。感情を露骨に表わしすぎないだろうか。何でも度を越してはいないだろうか。わがままではないだろうか。万事に尊大ではないだろうか。あなたは子供を持ちたいと思っているだろうか。夫のために毎日喜んで食事作りをする気持があるだろうか。これまでの友だちも大切にして、夫と同じような気づかいが払えるだろうか。

ウィリアム・ジェームズは「私の世代にあって最大の変革は、人間が内的姿勢を変えることで生活の外的様相を変えることができるという発見であった」と述べている。

毎日すらっとした自分の彫像の前に立つことで、背がぴんと伸びたせむしの王子の話もある。

変化は、望ましくない習慣が良い習慣に代わることで起きる。あなたは良い思いと良い行ないによって、自分の性格と未来を形成するのである。自己憐憫は最も有害である。あなたは自分を哀れんではいないだろうか。

あなたは何をしなければならないだろうか。

身じまいをきちんとし、服装を整えて外側を魅力的にし、心もはつらつとしていて魅力があるだろうか。読書によって心を豊かにしているだろうか。もしそうでないならば、自分を変えなさい。

愛する兄弟姉妹たち、教会はこのようなことを大切にしている。しかし、たとえ私たちに魔法の杖があり、それをひと振りしてあなた方の問題を好きなように変えることができたとしても、それはあなた方のためにはならない。自分で努力してこそ成長があるのである。

あるひとりの姉妹のことが思い出される。彼女は長老見込みの兄弟と結婚して生活を営んでいた。ところがやがて、幾人かの友だちがいつも夫婦で一緒に教会に出かけたり、聖歌隊で歌ったり、神殿に行ったりして、幸せな充実した生活を送っている様子が気になり始めた。そこで彼女は、「どうしてみんなの御主人のようにして下さらないの」とか、「どうして教会にもっと活発にならないの」と、夫をなじるようになった。

たまたま彼ら夫婦の所属するワード部はうるさいくらいにフェローシップに力を入れていた。そのため、やがてその不活発な夫はその意気に感じて、家族と教会活動に大きな喜びを見出すようになった。ところが、それまであんなにぐちをこぼしていた妻が、今度は夫が熱心になったことを不満に思い、「どうして教会の仕事に時間と力を全部さかなければならないの」とか、「ほかの人のように、私に楽しい思いをさせてくれないの」と文句を言い出した。夫はついに妻のぐちに足を引っ張られて、また不活発な状態に逆戻りしたのである。

外見も心も霊も、そして情熱的にも常に魅力ある者となり、ぜひ適齢の人たちと会える場所に出かけるようにしていただきたい。

あなたの居場所は適当だろうか。かたよってはいないだろうか。ある若い女性が20代のなかばを過ぎても機会に恵まれなかった。私は彼女に、年かさの女性ばかりの家から独立し、速記の仕事をやめて、大学で同年齢の人たちと交わるように勧めた。それからしばらくして、ある日その大学に出向くと、彼女が髪に明るい色のリボンを結び、にこやかに楽しそうな人柄を見せて、そよ風のようにさっそうと私のところにやってきた。そしてその数カ月後、私は神殿結婚に招待されたのである。いつもそのように都合良く事が運ぶわけではないだろうが、このようなこともあるのである。

恵まれた理想の日が明けるのを待っている間に、私たちには他の人の人生を明るくするためにできる行ないがたくさんある。そしてその行ないは、やがては自分に返ってくるのである。

「神は私たちを認め、私たちを見守っておられる。しかし普通の場合、神は人を通して私たちの必要に応えられる。」

1924年の迫害

16キロの山道を教会に通ったウェールズの人々

トーマス・J・グリフィス

1924年、私たちはウェールズ、モンマスシャーのアバカーン村に住んでいたが、村で末日聖徒は私たちだけだった。そのためアバカーン支部の会員は私たち一家だけであったが、組織は完全だった。日曜日の朝は日曜学校、夜は聖餐会で、火曜日の夜はＭＩＡを行なっていた。私たちは一緒に歌ったり祈ったりして、家族の間には大きな愛が満ちていた。しかし私たちの活動に愛と一致があったことはサタンの気にさわったらしく、それを邪魔しにかかった。

私たちはまもなく、迫害がどんなものかということを知るようになった。人々は私たちをあざけり、頭に角がないかと、帽子を取られることが何度もあった。しかし私たちはどんなことでも我慢できた。そんなある日、村の若い女性が福音を学び始めた。彼女の父親は村のある大きな教会の指導者で、娘が私たちの教会の家庭集会に来ていることを知るとひどく怒り、私たち家族と教会を中傷しだした。やがて別の人たちからも中傷の声が上がるようになり、グリフィス家はひどい迫害に包まれることになった。

地元の医者までが、30人の娘たちがウェールズからかどわかされて、壁をめぐらしたソルトレークの町に幽閉されていると新聞に書きたてた。そのほかにもモルモン非難の記事が出て、あるときには私たち家族を町から追い出そうと言われたりした。

当時、私たちは村有の家に住んでいたが、ある日村議会から、家で礼拝するのをやめなければ、強制立退きを命じるという通告が来た。そこで父が教会の指導者に助言を求めると、教会からは「われらは、……法律を守り、敬い、支うべきを信ず」という信仰箇条12条に従うようにという指示があった。

それで、信仰を培ってくれた素晴らしい集会は中止されることになった。わが家から一番近い支部は、ウェールズの山をいくつか越えて16キロほど行ったバーテグという小さな町にあった。あの最後通告を受けた後のある晩、父は家族全員を呼んで、日曜日に山道を歩いてバーテグへ行けば、集会に出席して聖餐を受けることができるのだがと、話をした。その賛否をみんなに問うと、まだ僅か８歳だったアイバーまで全員が賛成した。そういうわけで私たちの、人生でもめったにない大冒険が始まったのだった。

ランバック山を登りつめ、ハフォドライニス渓谷へ下り、それからポンチプール山を越えてバーテグに入るのだが、その道々、私たちは歌ったり聖句を暗誦したりした。一度深い霧のために迷ったことがあった。そのときは、父はみんなを集めて小さな輪を作って祈った。父は目的地へ導きたまえと神に願った。するといつもならウェールズの山のあたりを吹く風がそこまで上ってきて霧を晴らし、山が見えるようになった。恐らくたまたまそうなったのだろうが、私はそれが父の祈りの答えだと信じている。

雨降りの日には肌着までびしょぬれになった。そんなときはバーテグの聖徒たちが乾いた服を貸してくれ、ぬれた衣服は火のまわりで干してくれた。借りた服が寸法の合わないこともあり、お互いにおかしな格好を笑い合ったりしたものだ。しかし、そんな不便や苦労も、その日の集会の雰囲気に浸るとすっかり忘れてしまった。私は父の大好きな聖句を今でもよく覚えている。「ふたりまたは三人が、わたしの名によって集まっている所には、わたしもその中にいるのである。」(マタイ18：20)　全くその通りだった。主のみたまが非常に強く働いて、私たちの疲れた体は再新

され、霊は高揚した。

数週が数ヵ月となって、日曜日ごとのバーテグへの旅は続いた。そうしたある日、村議会に1924年4月12日付で一通の手紙が届き、論議を呼んだ。それは神の僕の手に成る霊感あふれる書状だった。

「最近貴議会が村民のひとりを相手どり、家庭での礼拝の権利を剝奪したと報じるサウス・ウェールズ・アーグス紙の切り抜きが、今私の机上にあります。その独断的行為の理由は、彼がモルモンだからというだけだとのことです。

現在モルモンという言葉は、愛とはおよそ無縁のもので、悪意ある人々にとっては罪の権化でもあるため、貴議会の取られた措置は、その理由からして充分うなずけるものであります。とりわけそのように信ずる人々にとっては。しかしそれで充分な効果が上がったでしょうか。問題の紳士が今もって家で祈りを捧げていることは御存知でしょうか。『中傷宣伝協会』とやらから、あの措置を講じた当の人物と子女が日夜彼らの神に感謝を捧げていることを知らされてはいないのでしょうか。

なぜ他のキリスト教徒の村議会議員が所有する家ではそのような祈りをしてはならないと、命じられないのですか。他のキリスト教徒が讃美歌を歌い、家族や友人や善なる慈悲の神のみまえで話をすることを禁じる権利があなた方にあるのなら、『モルモンである』という理由で、祈りをやめよと命じる権利もありましょう。かくして彼は、最もいつくしまれてきた昔ながらの特権のひとつを剝奪されるのです。何でもすぐまに受ける人々は、彼の生活がいかに正しくともそれにはおかまいなく、彼が何か不都合を起こしたために公益を慮って家での礼拝を禁じたと推測します。2千年の昔、ダニエルに同じような命令を下したメディア人やペルシャ人に良い範があります。あなた方はなぜ子供に祈りを教えることを彼に禁じて、その見事な法令を完成させないのですか。

さらにその措置を裏づけるために、ちょうどテベル川の氾濫が初期のキリスト教徒のせいだとされたように、「2年前30人の乙女がマカンという町からいなくなった。だから、英国のどの町からどんな少女たちがいなくなっても、それはモルモンのせいだ」とする証拠をあげることはできますか。

また情け容赦のない人々が彼らをどんなに悪く言おうとも、新聞の読者は新聞ならモルモンに対するそれらの嫌疑をすでに調査しているだろうと考えます。もしその調査をせず、調査をしていないということが事実を知るすべての人の目に明らかであったなら、あなた方は中傷の荷担者となります。個人もしくは一団体にそのように不当な審判を下すことは、識者の集まりには似つかわしくありません。私の母が生まれ育った国の人々がそのように偏狭であろうとは、どうしても思えないのです。

— デビッド・O・マッケイ —

村議会はこの書状を棚上げにすることを決めた。しかし時すでに遅く、その内容は地方新聞に掲載されてしまった。父は英国在郷軍人会婦人連盟の招待を受けてある会合で話をした。それから何年も経つというのに、その晩父が婦人たちを前にして話したときのことを思い出すと、いまだに心が躍る。父は教会に改宗した顚末と、家族に加えられた迫害の話をした。そして、少年ジョセフ・スミスと彼が見た示現、彼が死をもって証を結び固めたことを話した。それから、イエス・キリストの神性を熱心に証した。

その場に出席した婦人たちの目には涙があふれ、父が話を終えても拍手さえせずただ静まりかえって、自分の村で起きたその出来事を恥じているようだった。そのことを、私はよく覚えている。

父が腰を下ろすと、議長が立ち上がって、グリフィス家に家で礼拝する許可を与えるよう、婦人連盟で村議会にかけあってはどうかという動議を出した。動議は満場一致で可決された。それから1週間少しして、村議会から父あてに、議会で十分に検討した結果、家での集会を再開してよいことになったという通知が届いた。

娘に教会の集会への出席を禁じていたあの父親は、いまだに私たち家族とひと悶着起こそうとしていたが、あるとき奇妙なことが起きた。私の父がある晩彼の家へ行くと、玄関の扉のところで彼に出くわした。父は彼の名を呼んで「私たち家族に対する迫害をおやめにならないと神は、必ずやあなたを辱められます」と言った。ところがそれから数ヵ月の間に、彼の鼻を折る出来事が実際に次々と起きたのだった。長女が家出して村の大酒飲みと結婚し、長男は炭坑で大けがをし、末の息子は不治の病に冒された。そしてついに、忘れることのできない晩がやってきて、わが家の玄関でノックの音がした。父が出てみると、そこには私たちを迫害し続けたあの父親が立っていた。彼はうなだれて、こみあげる思いに声を震わせながらひと言、「グリフィスさん、赦していただきにあがりました」と言った。

彼の娘はやがてバプテスマを受けてユタに移住した。そして立派な男性に出会い、神殿で結婚し、幸せな家庭を築いた。彼女はすでに故人となったが、末日聖徒イエス・キリスト教会にだけ見られる勇気と信念の遺産を子供たちに残している。

私たち家族は、イエスが「義のために迫害されてきた人たちは、さいわいである、天国は彼らのものである」(マタイ5:10)と言われた言葉の意味を、今さらながら知った。ウェールズのあの小さな村は、私たちのささやかな天国だったのである。

(トーマス・J・グリフィスは、アメリカンフォーク・ユタ・ノースステーキ部のアメリカンフォーク第8ワード部で日曜学校の教師をしている。)

質問

出エジプト記28章に出てくる胸当てがどのようなものか、ユダヤの伝承や歴史からわかりませんか。

答え

ビクター・L・ラドロ

ブリガム・ヤング大学

古代聖典学助教授

裁きの胸当てとそれにつけられたウリムと※トンミム（トミム）は非常に神聖なものであったため、ユダヤの伝承では、裁きと決断を下すときに身につけたと言われているだけで、どのような外観を呈していたのかはっきりしていません。しかし、中世の偉大なユダヤ人哲学者であった、ユダヤ教法典学者のマイモニデスの言葉と、若干のユダヤ教法典とから、胸当の外観がいくらか明らかになっています。

伝承によると、胸当には、イスラエルの12の部族の名がそれぞれひとつずつ刻まれた12個の宝石がついていました。そしてそれぞれの宝石は正方形で、金の台が付いており、28本の糸で巧みに編んだ編細工の中にはめこまれていました。1本の金糸を6本の青糸と撚り合わせて、1本の太い糸を作ります。そして、別の1本の金糸を6本の紫糸と撚り合わせて1本の太い糸を作ります。また、緋糸と亜麻の撚糸についても同様に、それぞれ1本の金糸と撚って太い糸を作ります。それから、これら4種類の糸を織って、幅が1指、長さが2指の織り物を作ります。ここでいう1指とは、親指と小指とを張った長さです。この織り物はふたつに折ると、長さと幅が共に1指の正方形の袋状になります。さらに金の宝石台を4列、その表面に取り付け、またウリムとトンミムはその織り物の袋の中に入れました。

こうして作られた胸当の四隅には金の環が付いていました。上部の2個の環は、エポデ（衣の上に着用した長上衣）の肩についている同じような金の環に純金の鎖で取り付けられました。また下部の2個の環は、腰のあたりで、青いリボンによってエポデの金の環につながれていました。

大祭司は務めに携わるときに、この胸当とその他の神権の衣を身につけました。そしてこの胸当は、末日聖徒がよく知っているように、ウリムとトンミムとひとつになって、ある大切な役割を果たしていたのです。王やサンヒドリンの長、あるいはその他一般に認められた者は何か特別な問題に出くわしたら、大祭司のもとへ行きました。すると大祭司は胸当を付け、刻まれているどの文字が最も輝きを放っているかを見ます。そしてこれらの文字から答えを組み立てて解決を与えたのでした。例えば、ダビデが主に、サウルの追跡が続くかどうか尋ねたとき、大祭司のアビヤタルは3つの文字が輝いたのを目にしました。ユダの名前のYod、ルベンの名前のResh、ダンの名前のDaletが輝きを放ち、YEREDすなわち「彼は下って来る」と答えがあったのです。

ユダヤの伝承によると、ウリムとトンミムは最初の神殿が破壊されて、ユダヤ人が捕われて行ったとき以来失われてしまったと言われています。

それから幾世紀も経ち、ユダヤ人がヨーロッパ各地に散在して住むようになると、方々のユダヤ人の社会では胸当が作られ、ユダヤ会堂のトーラーの炉だなにそれが飾られるようになりました。これらの胸当は大祭司のそれに似ており、12個の宝石の模造品がついているものもあります。しかし、昔イスラエルが所有していた胸当、ウリムとトンミムは現在ありません。

※訳者注：末日の聖典では「ウリムとトミム」として使用されているが、この記事では旧約聖書にならい、「ウリムとトンミム」とした。

質問

なぜエリヤは生きながらにして天に取り上げられる必要があったのでしょうか。ほかにも死を味わうことのなかった人がいますか。モーセは死なずに身を変えられたと考えてよいでしょうか。

答え

アルマ・P・バートン

ブリガム・ヤング大学

教会歴史・教義学教授

エリヤ（エライジャ）とモーセは、キリストが死に身を委ね、復活される前に、この世に関連のある儀式を施すよう予任されていました。ですから、普通の人間として寿命を越えて肉体を保ち続けることが必要でした。ジョセフ・フィールディング・スミス大管長は、このことについて次のように書いています。

「モーセとエリヤ（エライジャ）がかの山で救い主のもとを訪れ、ペテロとヤコブとヨハネに姿を現わしたが、一体それは何のためだったのだろうか。これら3人の使徒を励ますために、霊の姿で現われたのだろうか。彼らは、この世で業に携わっておられる神の御子に慰めを与え、十字架の刑に備えさせるためだけに訪れたのだろうか。その答えは否である。それが目的ではなかった……予言者ジョセフ・スミスは、次のように説明している。

『神権は永遠不変のものである。救い主とモーセとエリヤ〔エライジャ〕

は、かの山上において主の前で変貌したペテロとヤコブとヨハネに鍵の3人を授けたのであった。神権は永遠不変である。生涯の初めも、生命の終りもなく、父も母もない。儀式に変更がなければ、神権も全く変わりない。そして福音の儀式が執り行なわれるところには、必ず神権がある……キリストは大いなる大祭司であり、アダムはその次に位する。』」（*Doctrines of Salvation*「救いの教義」、第2巻 p. 110）

最初に復活した人はキリストですから、だれか予言者が主の復活以前にこの世に関わる儀式を執行しようとした場合、その人は肉体を持ったままの状態でとどめておかれる必要がありました。そこで主はモーセとエリヤを生き長らえさせ、彼らが所有していた鍵をペテロとヤコブとヨハネの3人に変貌の山で授けさせたもうたのです。

そのほか、愛弟子ヨハネと3人のニーファイ人も身を変えられ、現在なお託された務めに携わっています。エノクとその民も身を変えられて天に取り上げられましたが、キリストの再臨のときにこの地上に戻ってくることになっています。またほかにも、アルマのように、いまだに死を味わっていない人々がいます。

予言者ジョセフ・スミスは、身を変えられること、すなわち人がある力を受けて触知できる肉体に留めおかれることについて、次のように語っています。

「多くの人々は、身を変えられるということが直ちに神のみもとに取り上げられ、永遠の完き状態に入ることであると考えている。だが、この考えは誤っている。彼らの住む場所は月の光栄の状態であり、そのためにひとつの場所が備えられているからである。神はこれらの人々を、導きと教えを施す天使として多くの惑星に遣わすため、とどめておられる。しかし彼らはまだ、死から復活した人々の受ける完き状態に入ってはいない。」（Documentary History of the Church「教会歴史記録」、第4巻、p. 210）

質問

出エジプト記にはウリムとトンミムのことが述べられていますが、それはモーセの時代にどのような役割を果たしていたのでしょうか。それはどこから来たものですか。モーセの時代以後は、どこで、どのように使われたのでしょうか。

答え

キース・H・メサビー

ブリガム・ヤング大学
古代聖典学助教授

イスラエルのウリムとトンミムについて現在わかっているところでは、レビ神権を持つ最初の大祭司であったアロンに、神権に伴う権利として与えられたのがはじめです。（出エジプト28：31、レビ8：8） アロンは、モーセの律法をつかさどるアロン神権に関わる事柄について知ることを、ひとつの務めとしていました。（教義と聖約68：14－21、84：18－27） 王たちは、アロンを通して主から受けた勧告に従わなければなりませんでした。そのとき、アロンの使った方法はいろいろありますが、最も重んじたものはウリムとトンミムでした。モーセが後継者としてヨシュアを召し、任命するにあたって、主は次のように指示を与えておられます。「彼（ヨシュア）は祭司エレアザルの前に立ち、エレアザルは彼のためにウリムをもって、主の前に判断を求めなければならない。ヨシュアとイスラエルの人々の全会衆とはエレアザルの言葉に従っていで、エレアザルの言葉に従ってはいらなければならない。」（民数27：21）

この記録から、ウリムとトンミムは、神の啓示やみこころを賜わるための道具として指定されたものであることがわかります。

これを通して、サウルは罪がだれにあるかを知ろうとしたことがあります。（サムエル上14：41） まだダビデも神の導きを求め、事態がどのように進展するか、前もって知ることができました。（サムエル上23：6－13）このウリムとトンミムはエポデについていたと私たちは考えています。

ところで、前にあげた例のようにいつも答えが与えられるとは限りません。例えば、サウルが伺いをたてたとき、主は彼に語らず、またいかなる方法によっても、ウリムによってでさえもそのみこころを告げられませんでした。（サムエル上28：6）

バビロン捕囚後、ユダヤ人の手にはすでにウリムとトンミムはありませんでしたが、そのときまでウリムとトンミムがどうなっていたのか、イスラエルの歴史は何も告げていません。しかしながら、義にかなった行ないをしていた王や民は、その当時までウリムとトンミムを使って、主の勧告を求めていたことは明らかです。ウリムとトンミムがバビロンからの帰還後ユダヤ人の手に戻っていたら、失われた系図の問題は解決されていたことでしょう。そのことを考えると興味があります。というのは、この系図の問題は、神権の所有権がレビまたはアロンの子孫にのみあるということで、ユダヤ人にとってとても重大だったからです。（エズラ2：62、63）

ユダヤ人がいつからウリムとトンミムを使用しなくなったか、正確な時はわかりません。しかし、人々はエレミヤとエゼキエルの時代に予言者を拒んでおり、主から、啓示の光をもはや受けない時代になりつつあるという警告を下されています。この結果、彼らがウリムとトンミムを失ったのは、征服を受けたり、軽率であったりしたためではなく、その邪悪な行為によると思われます。（ジョセフ・スミスの経験については、「教会歴史記録」、第1巻、p.21－23を参照のこと。教義と聖約3：11、10：2と対比せよ。）

質問

主は、イスラエルが約束の地で他の民と戦うのをなぜ許されたのでしょうか。

答え

キース・H・メサビー
ブリガム・ヤング大学
古代聖典学助教授

この質問に答える前に、民がこの地を所有する権利を持つのはどのような状態のときかについて、少し検討しなければなりません。

主はアブラハムにカナンの地を与えると約束されましたが、そのときにすぐ与えたのではなく、将来そのようなことがあるとの約束を下されたのでした。これには大きな意味があります。アブラハムの時代には、まだカナンの民にその地を所有する権利があったからです。しかし後にこの民は罪悪のために土地の所有権を失い、代わりにイスラエルがそれを受け継ぐ正統な継承者となるはずでした。（創世15：16、Ⅰニーファイ17：32－40。イテル2：8、9と対比せよ。）

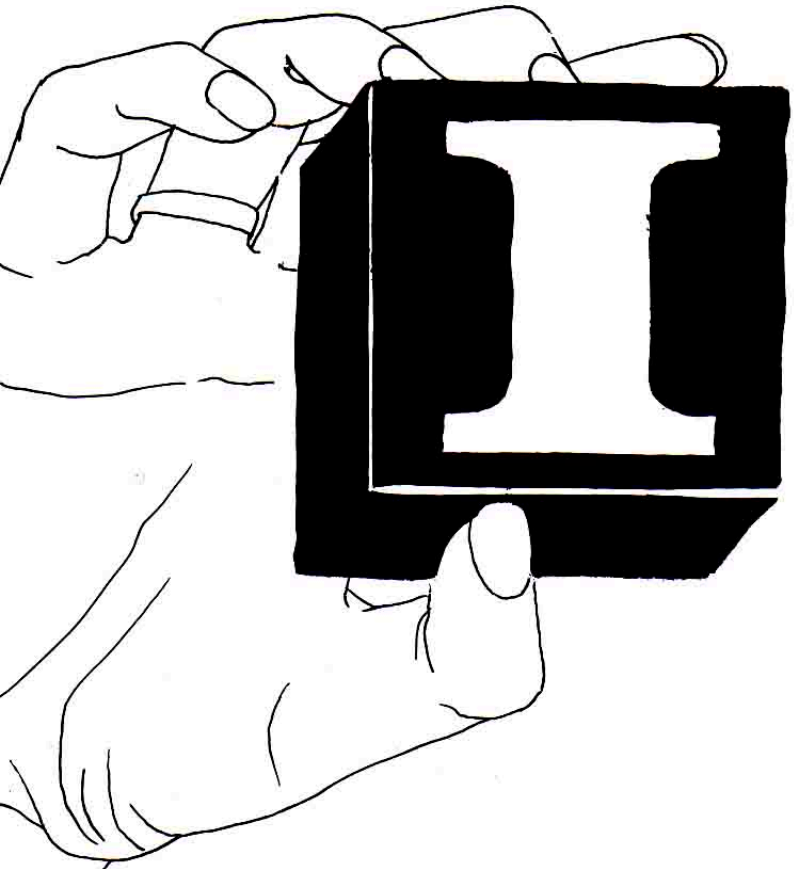
カナンの民についてはあまり多くの記述がありません。けれども、モーセとヨシュアの時代までには、すでにカナン人（アモリ人）は非常に邪悪な民になっています。そのことは、主がイスラエルに、カナン人の生き方に決して倣わないよう繰り返し警告を与えられたことからわかります。性的な罪、すなわち姦淫、近親相姦、獣姦、同性愛が横行していたのでした。主はイスラエルの民に次のように命じておられます。「あなたがたはこれらのもろもろの事によって身を汚してはならない。わたしがあなたがたの前から追い払う国々の人は、これらのもろもろの事によって汚れ、その地もまた汚れている。ゆえに、わたしはその悪のためにこれを罰し、その地もまたその住民を吐き出すのである。……これらのもろもろの憎むべき事の一つでも行う者があれば、これを行う人は、だれでもその民のうちから断たれるであろう。」（レビ18：24：29。レビ20章と対比せよ。）

この試しの世にいる間に、その罪悪は処置なしであると烙印を押された者は、この世において主の裁きを受けました。（教義と聖約76：103、104）主は、彼らの罪悪によって地が汚され、またこれから生まれてくる子孫がその堕落した行為に惑わされることをよしとせず、彼らをこの世から取り去られたのでした。主は、洪水や火事、飢饉、地震など、いろいろな方法でこれを行なっておられます。つるぎもお使いになりました。ジェレド人やニーファイ人、イスラエル人、ユダヤ人、それに、レーバンなどはみな、たちまちのうちにその裁きに倒されたのでした。

イスラエルの民は、カナン人に主の裁きを下すという、喜ばしくない務めをおおせつかったのです。その民にあわれみを示さず、滅ぼしてしまうようにという命令を主は下されました。（申命7：1－3）　同時に、前の住民を追い払った後に、自分たちが正しいので主はそうさせて下さったのだなどと考えてはならない、それは彼らがそこに住める状態でなかったためであるとも言っておられます。次いでイスラエルの民は、前の住民がその地に住めなくなった理由をよく心に留めておくようにと命じられました。（申命9：4－6）

主は罪を見ていささかもこれを許す御方ではありません。（教義と聖約1：31）　主はいつも罪と戦っておられます。イスラエルがカナン人に戦争をしかけたのは、主がそのように命じられたからでした。（ニーファイがレーバンを殺したのも、同じ理由によります。）これは不正に対する主の戦いでした。主に従順であるということは、主の命ずるとおりに行なうことでした。これによって、悪との壮烈な戦いで彼らがどちらの側に立っているかがわかるのです。

主がなぜ彼らにこれを求められたのか、私たちにはわかりません。彼らに故国を持たせるためであったのかもしれません。でもそれは、無償の贈り物としては与えられませんでした。あるいは、大きな罪悪の結果を彼らに知らせるためであったかもしれません。その正しい理由は何であれ、たとえ私たちに現在その一部しか理解できなくても、主のとられた方法は必ず正義にかなっているのです。



信仰を擁護して

十二使徒評議員会補助
セオドア・M・バートン

まだほんの子供の頃、私は母からいろんな色の区別について教えられた。母は青色のものを取り上げて、これは青色ですよと言い、母の言葉を私に繰り返させたのだった。それからしばらくして、もうひとつ別の青いものを手に取って、私にその色を尋ねた。

「緑？」私は言った。

「いいえ、これは青よ。」母は私の答えが間違っていたのを別に叱るでもなかった。

「青なの。」

「そうよ、これは青よ。」

それからまたしばらくして、もうひとつ別の青いものを取り上げてその色を尋ねた。

「黄色？」

「いいえ、黄色じゃないわ。」このときも、やさしく教えてくれた。「これは青よ。」

私は「青」と繰り返した。

「そうよ、これは青。」

母は私をしばらく遊ばせてから、さらに別の青いものを取り上げて尋ねた。「これは何色かしら？」

「青？」

「そう、そのとおりよ。」母はよく答えたとばかりに私を強く抱いて、ほうびのキスをしてくれた。こうして私は色の区別を知るようになった。

私に色の区別を教えるために、母がどれくらいの期間忍耐したか、私は全く知らない。ほかの子供たちよりも早く覚えたか、それとも時間がかかったか、知らない。けれどもついに、青色をほかの色と区別できるようになったのである。今では、もしだれかがこの色のものを取り上げて何色かと聞いてくれたら、私は自信たっぷりに、「青」と答えるだろう。そして、その色はなぜ青かと尋ねられたら、「青く見えるから」と答えるだろう。ほかの人が見ても、それは青だと答えるだろう。それは、この色を青と呼ぼうという互いの申し合わせによって、青と呼ばれているからである。つまり、私たちが知っていると答えるものはすべて、そのように教えられてきたためである。私たちの知識を、過去に教わり、読み、聞き、体験してきた事柄に基づいている。

大学に通うようになると、私はそれまで真実であると信じ、また確信していたある事柄に対して、大学教授からあざけりを受けた。彼らは、私が幼ない頃から教えを受けてきた宗教とは全く無縁の事柄を信じていたのである。そのため、神に対する私の信仰を、単なる迷信のたわごとだとちょう笑したのだった。彼らはモルモン経をなぐさみものにし、ジョセフ・スミスが予言者であるという考えをあざ

笑った。しかも、聖書は文学書以上の何ものでもないと言うのである。私は圧倒されてしまった。

大学教授は私に比べて学識があった。一流大学から博士号を得ていた。本もたくさん読んでおり、彼らが教えるすべての事柄には確かな解答と証拠があるように思えた。私は一介の学生に過ぎないが、彼らは長年の学究生活によって研究と経験から豊富な知識を得ている教授である。「彼らから強い印象を受けた」という言葉だけでは、当時の私の心の状態を表わすのには、はなはだ控え目すぎる感がある。私の信仰と信念は大きく揺れ動き、私は確固たるものを見失ってふらふらしていた。一体何を真理として受け入れたらよいのだろうか。学識あるこれらの人々の教えを受け入れるべきか。それとも、両親や日曜学校、初等協会、宗教クラス、それに神権クラスの教師たちに教えられたことと、自分の体験から学んだことを信じ続けるべきなのか。

現在、私は精密科学の分野の博士号を得ている。それは、合衆国中西部の大きな大学で取得したものである。また、化学の教授として他の大学で教鞭をとったこともある。さらに、自分自身でも研究を行ない、学生をも指導して、独自の科学の探究を行なった。そして今では、科学について、事実と理論の間には相違のあることを認めるに至っている。私はこれまでの研究と経験から、最も精密な科学の分野においてでさえ、ある種の事柄を信じるという前提が必要なことを知っている。法則といわれるものには限界があり、法則を適用するときには、必ずその限界を考慮する必要がある。私の学生時代の教授は、今日に至ってもなお立証されていない理論に基づいて話をしていたのである。彼らは、実証されていない事柄を事実として受け入れていたのだった。けれどもその頃の私は、そのことを知らなかったのである。

当時のことを思うと身震いする。彼らは自分の信じるところに極めて忠実だった。そのような人々に従い、人の立てた理論を真理として受け入れ、教会に対する私の信仰と立場を放棄してしまうことは、いともたやすいことだった、今はこのようにある程度知識や経験を持っているからいいが、これなくしてもう一度今まで歩んできた人生を繰り返してみろと言われたら、私にはその自信がない。

立派な両親がいたことを、私はとても感謝している。陽気な素晴らしい父母であった。両親は私たちを愛し、私たちも両親を愛していた。それで、私は幸せで何の心配もなく子供時代を過ごした。信仰のぐらついた大学時代には素晴らしい監督の助けを受け、また後に教会の大管長になった偉大なステーキ部長の指導にあずかった。とりわけ、父はやさしくて忍耐強く、私を励まし、大きな助けを与えてくれた。さらに大学には、立派なすばらしい教授が何人かいて、信仰を持ち続けるように私を励ましてくれた。彼らも、私の両親や教会の指導者と同じように、幸せな人生を送っていたのだった。彼らの中のある人々は、教会の指導者として忠実であった。そのひとりは主イエス・キリストの使徒となり、ほかの人々も、隣人に心から奉仕をし、神への信仰をしっかりと守った立派なクリスチャンとして生活していた。

一方、神と教会の理想とを否定するよう私を誘った人々は、必ずしも幸せな生活を送ってはいなかった。ある教授たちは私の信仰心を惑わし、またある人々は痛烈に私を批判した。しかし幸いなことに、私は自分が真理だと思ったことを擁護しようと決心したのだった。ひとりの教授が私の教会の教えをひやかしたとき、私は彼に率直にこう言った。「先生、私にはあなたのおっしゃることが信じられません。試験では、あなたの望まれるような答えを書きましょう。でも、そうだからと言って、私がそう信じているわけではないことを御承知下さい。私は神が生きておられることを知っています。そして、真心から神を信じています。私はあなたの講義は受けますが、自分の信じていることは変えません。」彼は私の顔をじっと見つめ、首を横に振った。しかし私は以前に宣教師として働いたことがあり、真実であると心に強く感じた事柄を否定することはできなかった。その教授に私が信じていることを立証することはできなかった。けれども私はこのことを信じており、そのことで希望と慰めとを得ていたのだった。

母から、青は青であると学んだように、私は父と母から、神は神であることを学んだ。両親は私に信仰を教え、私は信じた、そして現在、私はイエス・キリストが神であり、神権の力が地上に回復されたことを証する特別の証人となっている。ここに至るまでの生活は苦しみが多く、遅々としたものだった。しかし、一歩一歩、神が現に生きておられ、現代の予言者を通じて語られるということを、信仰と祈りを通し、また研究と経験から知るようになったのである。

気持がふさいで、どちらの道に向かい、何を信じたらよいのかわからなくなったときには、これらの事柄が真実であることを理解できるようになるまで、しばらく私たちの言葉に従いなさい。主を求めるならば、主を見出すであろう。主を信じなさい。そうすれば、決して惑わされることはないであろう。信仰を保ち続けると、後に幸せを味わうことだろう。あなた方は、愛する神から希望の光を輝かす使命を託されて、この地上に送られてきた特別な人々である。世の人々は、この多難な時代に導きを与えてくれる指導者を必要としているのである。

隣人愛の模範
——オズモンズ

コーリン・ヘンリックセン

歌声は希望の光となって

オズモンズは音楽の場だけでなく、音楽を離れても強い兄弟愛に結ばれています。彼らは働くこと、遊ぶことそして食べることにおいてもいつも共通の場を持っています。オズモンズは、レコードを吹き込んだり、素晴らしいコンサートを開いて兄弟愛を深めるだけでは足りず、ひとつの財団を作って人々の間に兄弟愛を一層深めようとしています。

オズモンド財団は盲人、聾唖者を助け、麻薬やアルコールの中毒患者を救い、世界中に兄弟愛と友好が広まるようにという目的の元に組織されました。

これらの目的は末日聖徒イエス・キリスト教会の会員であるオズモンド一家にとって、特別な意味があります。それは福音を広めるという使命をも帯びているからです。

オズモンド財団の組織、経営はすべてオズモンド一家が担当します。家族は全員その活発な参画者です。一家の父親であるジョージ・V・オズモンド・シニアが会長を務め、妻のオリーブはその秘書として働き、また副会長は息子のアランです。息子のバールとトムはマネージャーで、ウェイン、メリル、ジェイ、ドニー、メリー、ジミーなどの子供たちが手足となり、声となって精神的な援助を与えています。彼らは公演の合間をぬってはユタ州のプロボにある家に集まり、オズモンド財団に送られてくる手紙の整理をしたり、郵送の手伝いをしたりします。

なぜ彼らはこのように、不幸な人々に深い関心を寄せているのでしょうか。

それは家族の中で歌っていないふたりの兄弟バールとトムを見れば察しがつくと思います。ふたり共耳が完全には聞こえないのです。他の兄弟が歌って名声を高めているときにも、ふたりは必死に苦難と闘ってきました。

トムの耳はバールよりもさらにひどく、大きな苦しみに耐えなければなりませんでした。

当時を振り返ってトムは次のように言っています。「私は鏡の中の自分の姿をじっと見つめ、流れる涙をぬぐってこう言いました。『トム・オズモンド、お前は自分の力で必ずこの苦難を克服するんだ！』

しかし彼らにとって、そうした自分自身の問題に打ち勝つことはほんの始まりにすぎませんでした。カナダで伝道したバールとトムは、そこで聾唖問題が非常に深刻であることを知りました。心理的社会復帰、言語治療、教育などの分野の医学的研究がまだまだ進んでいないのです。

バールは次のように言っています。『私とトムはそのとき、「沈黙の世界」にいる人を助けるためならどんなことでもしようと決心しました。』

このようにしてバールとトムは、カナダ西部一帯に耳の不自由な人のためのプログラムを始める際に大きな力となりました。これはその後カリフォルニア州に耳の不自由な人のための伝道部を開く先駆けともなりました。

このような経験の中から、オズモンド財団創設の考えが芽生えてきました。そして家族の熱心な援助も得て、1971年の末に正式に発足したのです。

バールはまた次のように言っています。「私たちが抱いている長期的目標は、公演を通してオズモンズのファンをこの組織に加えていくことです。やがて彼らが小さな耳の不自由な子供たちにパンフレットを配ったり、話し方を教えたり、その他いろいろな点で援助してくれることを希望しています。」

またファンの人たちは耳の不自由な人に読むことを教えるだけでなく、読唇術や話し方を教えたり、野球や水泳を教えることもできます。

バールは付け加えて、「中には障害程度がひどく、普通の社会生活がむずかしい子供もいます。でも、彼らも私たちの仲間のひとりだと感じてもらいたいし、私たちができることは何でも彼らもできるのだと感じていただきたいと思っています」と言っています。

あるところでは、すでにオズモンズのファンの中からこのことに大変興味を覚えて、それを一生の仕事としようという人も出てきました。また聾学校で働いている人やソーシャルワーカーになる計画を立てている人も多くいます。

「すでにオズモンド財団を通して経験を得たファンの人々から数多くの手紙が届いています。多くの人はこう書いてくれています。『この仕事によって新しい世界が開けてきました。このような興味を育てて下さったことを心から感謝しています。』私たちがただ彼らに興味を起こさせ、問題意識を与えるだけであっても、少しは世の中のために役立っているのではないでしょうか」とバールは言っています。

またオズモンド財団は意思伝達の問題に取り組んでいる研究者とも協力して、教育方法の改善やいろいろな特別教育資材の開発にも力を注いでいます。

このような盲人や聾唖者への関心はもちろんですが、教会の教えから、アルコール中毒患者や麻薬中毒患者にも深い関心を寄せています。この問題をオズモンド財団の仕事のひとつに加えたのは歌を歌っている子供たちの考え

でした。

「世界中の何千という人々からファンクラブの本部に『私は麻薬を止めることができません。どうしたらいいでしょうか』という問合わせが殺到しています。子供たちは手紙を読んで、この人たちにも本当の助けが必要だと気づいたのです。」

オズモンズはテレビのコマーシャル映画を使って、麻薬の犠牲者を助ける計画を立てました。また財団の方でも麻薬の悪習に関するパンフレットを発行しました。

3番目の目標は人々の間に友好を深めていくことです。これはオズモンズにとっては、取りも直さず福音を広めることなのです。歌を歌っている子供たちは、機会をとらえては教会に対する考えを人々に知らせています。オズモンド財団も同様に隣人愛を通して少しずつ福音を広めようとしています。

福音の原則を広めることもそうですが、オズモンド一家こそ隣人愛の生きた模範と言えましょう。不幸な人々を卒先して助けようとする彼らは、多くの面において親善使節団としての役目も十分果たしています。

カリフォルニアに住むある14歳のファンから寄せられた手紙にはこう書いてありました。「こんな素晴らしい仕事をしているんだから、オズモンズって、みんな素晴らしい人たちばかりだと思います。」

オズモンズは共に歌い、そして共に奉仕しています。このようにしてオズモンド財団は、そのモットーの中に書かれているように、いつも「必要な人々に援助の手を差し伸べる」ことにまい進しているのです。

日々の恵み

「人と違う態度をとることは大変でした」

ヘレナ・ハンノネン
ラッペーンランタ
フィンランド
（ブリガム・ヤング大学学生）

1960年の初夏のこと、ふたりの青年が自転車のペダルを踏んでラッペーンランタの町の坂を登り下りし、ドアをノックしたり人々に話しかけたりしていました。一見して外人であることがわかりました。子供の私たちにとってはそれがもの珍しく、モルモンについて近所の人たちが話していると、いつも耳をそばだてたものでした。

そんなある晩、未亡人の母は、兄と私に、あの宣教師たちのことをみんなが悪く言っているのは一体どうしたことかしら、そんなふうにするのはがまんがならないと話しました。そして、彼らに家へ来てもらって、話を聞くつもりよと言いました。母のクリスチャンらしい考え方が何とうれしかったことでしょう。

私たちに教えてくれた長老は、フィンランド語がほんの少ししか話せませんでした。それで時々、子供の私たちに自分の話したことがわかりますかと尋ねるのでした。でも彼の言うことは理解できました。彼らは福音をはっきりとわかりやすく説明してくれました。そして私たちはその年の8月に、そろってバプテスマを受けました。

学校では何年もの間、末日聖徒は私ひとりでした。みんなと違う態度をとって、級友のぶしつけな言動に甘んじることは大変でしたが、よく自分に「勇気をもって人と違うことを！」と言い聞かせました。人の冷たい仕打ちに傷つけられることも、だんだんに怖くなくなってきました。自分から孤立するのではなくて、人々と面と向かいながら、違った生き方を選ぶ、つまり、人それぞれの権利を尊重することを学んだのです。

12歳の年に、私は初めて宗教の先生と議論をしました。私がある質問に対して、末日聖徒イエス・キリスト教会で教えられている考えを述べると、先生は間違いだとおっしゃるのです。立ったまま先生の言葉を聞いていると、私は主のみたまを身近に感じて、自分の意見を裏づける聖句を聖書から引用することができました。先生は、最後にはもう何も答えられませんでした。その日から私は、主が私たちの率直で謙遜な願いを聞いて下さるという証を持つようになったのです。

私の母は体は弱くても霊的には強い人で、自分で選んだ道を歩む私を助け、厳しい、しかしやさしい手で導いてくれました。私は母に励まされたおかげで、若い人たちがよくするように、タバコの煙のこもった薄暗い喫茶店で夜の時間を過ごすこともなく、音楽や絵や本やスポーツを楽しんだのです。やがて、私は級友たちから一目置かれるようになって、みんなのリーダーになりました。

朝の礼拝の司会の番がクラスにまわってくると、全生徒の前で信仰の話をするようにと、必ず私が頼まれるのでした。自分たちの教会の讃美歌を歌うかわりにモルモン・タバナクル聖歌隊のレコードをかけたりして、クラスの人たちは好意を示してくれました。

7年が過ぎたとき、私は宗教の先生から、教会についてクラスで15分間話をするように言われました。その話の後の質疑応答で、2回の授業がつぶれました。その後先生が私のところに来て、私が正しいのがわかったとおっしゃるのです。先生もモルモン経を読みたいとのことでした。

私は豊かな経験に恵まれてきました。救い主はいつも若い私の飼い手、私の光、私の友でした。

先生は間違いだとおっしゃいましたが、私は主のみたまに導かれ、先生は最後にはもう何も答えられませんでした。

祖父の勇気

アスムント・H・ヘルネス

ノルウェー、トロンハイム

私がノルウェーのナルビクにある末日聖徒イエス・キリスト教会の一員として成長することができたのは、母方の祖父のおかげです。ナルビクの港は一年中氷が張らないために、スウェーデンのラップランドから汽車で運ばれてくる良質の鉱石はみなこの港に集められ、ここから船で運び出されるようになりました。また収入の道にも事欠きませんので、たくさんの人々がナルビクへと移ってきました。そして今もなお外国からの出入りが盛んです。

私の祖父は1800年代の終りに学校の教師としてこの地へ来ましたが、歌手として教会から雇われてもいました。そして12人きょうだいの末であった母は、まだ小さい頃から、よく父のお伴をして方々行ったものでした。母が16歳のある日の夕方のこと、例によって祖父は町の集会に母を誘いました。祖父は何かとてもいわくありげでしたが、母には何も言いませんでした。そしてふたりは町で一番大きく立派な集会所の方へと歩いて行きました。そこでは有名な政治家の講演が行なわれていたのです。けれども祖父はそこに入ろうとはせず、その集会所の裏庭を抜けて見すぼらしい家へ母を連れて行きました。そこではふたりのアメリカ人が笑顔で祖父たちを迎えてくれました。

祖父はもちろん福音を聞かせるために母を連れて行ったのです。福音を聞いた母は、それが本当に正しいことがわかりました。最初母は彼らのぎこちないノルウェー語を理解するのに苦労しました。けれども、幼な子には罪がないので、バプテスマを施す必要はないという説明に、母はたいそう興味を覚えました。

ふたりの長老は熱心に母に福音を説きました。そしてある日、母は祖父にバプテスマを受けたいと話しました。けれどもわずか16歳の年端も行かない娘がバプテスマを受けてよいものかどうか、祖父は決めかねました。次の日の昼下がり、祖父は勤め先から5キロほどの道のりを家まで歩いて帰ってきました。母のバプテスマのことでとてもじっとしていられなかったからです。早々と帰宅した祖父を見て、母は体の具合でも悪いのではないかととても心配しました。当時は、勤務中に職場を離れることは、辞表を提出するも同然だったからです。祖父はバプテスマについて母に話をするためにわざわざ帰ってきたのでした。そして、この教会に入ると友人を失うだろう、それでもバプテスマを受ける勇気があるのなら許す、と祖父は言いました。そう言ったとたん、祖父は肩の荷が一気に軽くなったように思いました。それから再び職場へ戻って行ったのです。

バプテスマは、人気のない海岸で行なわれることになりました。そこから一番近い家の親切な老婦人が、着換えの場を提供してくれました。でも近いと言っても、海辺から1キロ半近く離れていました。宣教師たちのすることが母によくわかりませんでしたが、彼らが氷ついた衣服を身につけて戻ってきたときには、母はとても驚きました。それは10月で、気温は零下12度という凍りつくような寒さの中のことでした。でもありがたいことに、アメリカからはるばる流れてくる暖流のおかげで、水温は2度近くありました。

母はとてもしあわせでした。バプテスマを受けた当初は幼ななじみや親戚の人から見放されてしまいましたが、時が経つにつれて、ひとりまたひとりと戻ってきました。そして結局母はみんなから尊敬され、ほめられるようになったのです。後に母の両親もバプテスマを受けました。私は母の膝で福音を学びました。その当時ナルビク支部は最北端の支部で、教会の補助組織は十分な機能を果たしていませんでしたが、信仰篤い会員は少人数ながら、定期的に会合をもち、会う人ごとに、ジョセフ・スミスが主にまみえたことを熱心に語って聞かせました。

そして今、私たちは新しい時代の夜明けをこの目で見ています。標準聖典ばかりでなく、テキストやその他の資料もノルウェー語に翻訳されています。毎年キャンプやユース・コンファレンスが開かれ、また年に数回地方部大会と地区大会が開催されます。そして最近では、スウェーデンのストックホルムで非常に盛大に地域総大会が開かれました。私がかつて支部長を務めたトロンハイムやベルゲン、ドランメン、オスロには現在美しい近代的な拝礼堂が立っています。またヨーロッパの聖徒たちのためにはふたつの神殿があります。こうして今やノルウェーにおいて、福音は急速に人々の間に広まりつつあります。

バプテスマを受けた後、母は友だちや親戚の人々から一時見放された。しかしまもなく誇りとされるようになった。

主の戒めは祝福をもたらす

七十人最高評議員会会員
ハートマン・レクター・ジュニア

近代の予言者は、福音を分かち合う責任が主の教会の会員一人一人にあることを非常に明確にしてきた。しかしながら、私は現代の予言者が、主がかつて仰せにならなかったことを語るのは極めてまれであることを知っている。

「すべての会員は宣教師である」との命は、教義と聖約88章81節に記された主の宣言を言い換えたものである。

「見よ、われは民に証し民を警めんため汝らを遣わせり。されば、その警めを受けしことあるすべての人はその隣人を警むる責任あり。」

主のすべての戒めに関して言えることであるが、与えられた主の命令を遂行しているとき、私たちは自分の行動がどういう結果をもたらすかというはるか先のことまで完全には理解し得ないようである。しかし結果として、その行為により、私たちには常に豊かな祝福がもたらされている。なぜなら、主の本来の目的は「人に不死不滅と永遠の生命とをもたらす」（モーセ1：39)ことだからである。当然のことながら、私たちにとって主のすべての戒めは祝福なのである。

1952年、私は朝鮮戦争での戦役を終え、カリフォルニアのサンジェゴに帰還した。その年、私は東京にある伝道本部においてバプテスマを受けていた。改宗者である私は、自分が見出したイエス・キリストの福音をだれもが捜し求めているに違いない、そう思った。私にはイエス・キリストの福音がある。私は人の気持などお構いなしに福音を与えようとしていた。

やがて、私はカリフォルニアのチュラ・ビスタにある自宅とノースアイランド間を結ぶカー・プール※の一員となり、その働きに従事した。このカー・プールにはほかに4人の海軍兵が属していたが、皆教会員ではなかった。4人のうち3人は海軍大尉（私も同じ階級であった）。あとひとりは下士官で名前をジョージ・ホワイトヘッドといった。私はこれら4人の仲間を改宗するという期待に胸ふくらませ、4人の改宗は絶対だと確信していた。運転は片道45分を要したので、その間彼らは車外に出ることもできず、じっと私の話を聞かざるを得なかった。まずこの4人を改宗し、そうしたら次に別のカー・プールに移ってそこのメンバーを改宗し、次から次へと改宗しては引越そう、私はそう決心したのである。そうすれば、すぐにも完全なワード部に必要な人数を改宗することができるのだ。

私は4人の仲間に働きかけた。しかし3人（海軍大尉）は明らかにもう一言も聞きたくないという風であった。もし彼らが聞いたとしても何と表現したらよいか、言ってみれば私の話はあひるの背中に水をかけるようなものだったであろう。しかし、下士官のジョージ・ホワイトヘッドだけは別で、私をのけ者扱いしようとしなかった。関心があるのだ。そこで私は運転の番が自分に回ってくると、まず大尉たちを家に送り、それからジョージの家の前に車を止めて話すことにしたのだった。そのためジョージは車を降りる前に決まって1時間、私の話を聞かなければならなかった。

私はジョージに教会へ来ることを約束させようと努力し続けたが、約1ヵ月の間、彼は拒んだ。しかし、ついに私と一緒に出席することに同意すると、妻のルシールも一緒に出席しますと言ってきた。私はふたりの約束に感激し、喜びで一杯だった。ジョージとルシールが初めてモルモンの日曜学校に集おうとしていた前日の、土曜日の夜のこと

を私は今でも覚えている。その日、私は教会に出かけ、教会堂の裏口のドアを洗った。それは教会堂に入るとき、いつも私が使っているドアだった。そのとき、ある青年の協力を得たが、その青年は私を軽い精神病に違いないと思ったらしい。「どうして裏口のドアなんか洗っているんです？　そんなとこ磨く人なんてだれもいませんよ。」「いや、洗う必要があるから洗っているのだよ。」私は自信を持ってその青年に答えた。そして翌朝、ジョージとルシールのふたりがこのドアを通って来ることを話した。彼らが主の教会を目にし、そこに真の光を見るように、彼らにとってすべてが完全でなければならなかった。

私は、求道者を教会に最初に連れてくる宣教師以上に教会の外観や雰囲気に神経を使う人はいないと思う。赤ん坊がみな静かであり、また美しい音楽が流れていることはいかに大切なことであろうか。また席に着いたみんなが目を覚しているならどんなに素晴らしいことであろう。しかし、これは期待し過ぎのようである。

ジョージとルシールは日曜学校にやって来た。そして、そこで私はふたりと会った。その日の日曜学校は実に素晴らしいものであった。（彼らが出席したクラスの教師は、私だった。）ジョージの顔にはありありと感動の様子が伺えた。まるで海綿のように、見るもの聞くものすべてを求めて、ひとつひとつの言葉を自分のものにしようとしていた。ところが妻のルシールはと言えば、傍らでスフィンクスのように、無表情のままじっと座っていた。彼女が私の話を聞いていたかどうかはわからない。私は心配で、クラスが終わるやすぐ話しかけた。

昨夜きれいに磨いたあの裏口のドアを通って教会堂を出ながら、私は言った。「ルシール、今の日曜学校どう思う？」にこりともせずに彼女は答えた。「私はメソジストとして生まれました。だからメソジストとして死にたいと思います。」そのとき私は、まだリグランド・リチャーズ長老のイギリス人とスコットランド人についての話を知らなかった。それは、イギリス人が「私はイギリス人として生まれ、イギリス人として育った。だからイギリス人として死にたいのだ」と言うと、スコットランド人が「君は何の望みもないのか」と言った例の話である。

私はそのスコットランド人と同じように言い返すこともできたが、代わりにこう言った。「ルシール、私は君に約束するよ。末日聖徒となるために、君がメソジストとして学んだ真理をすべて捨てる必要は全くないのだ。私たちは他の教会や宗教関係者と論争する意志は全くない。だから他の教会に反対するチラシを書いたりしたことはないし、もちろん今後もそうするつもりはないのだよ。と言うのも、私たちの目的は人々の信仰をかき乱すことではなく、反対に人々の信仰を築くことにあるのだから。救いは『信仰を通して得られる慈悲』によってもたらされると信ずるプロテスタントの友に、私たちはこう言いたい。『私たちもそう信じている。聖典にも「信仰がなくては、神に喜ばれることはできない」（ヘブル11：6）と書いてある』とね。私たちは彼らの信仰をさらに増し加えたいだけなのだ。それでプロテスタントの友人たちに言うのだよ。『一緒にイエス・キリストの完き福音を分かち合おう。私たちは君たちの持っている真理を取り上げはしない。ただ君たちにない、ある業と神権の権能とを加えるだけなのだ。』」

その日、私がルシールに話したことはこのような内容だった。彼女はそれ以上何も言わなかった。この出来事があったのは1952年のことである。

1958年、私はまだ海軍に属してワシントンD．C．にいたが、その年、私は航空安全対策に関する特別コースに参加するため南カリフォルニア大学に行くよう命令を受けた。そしてロサンゼルスに滞在中、私はロサンゼルス神殿で多くの時間働くことができた。祖父母や曽祖父母のために働いたことを思い出す。そのとき、私のふたりの祖母と（福音を受け入れずに死んだ）私自身の母の身代りに儀式を受けてくれた女性は、ルシール・ホワイトヘッド、そう、「私はメソジストとして生まれました。だからメソジストとして死にたいと思います」と言った彼女であった。彼女が改宗するなど全く思いも寄らぬことであった。しかし、実際はカリフォルニアのサンジェゴで日曜日の朝私に例の言葉を言ってから、ちょうど3週間目にバプテスマを受けたのであった。なぜだろうか。それは彼女が聖霊に心を動かされて、福音が真実であることを悟ったからである。

神は実に不思議なことをなされる。カー・プールの仲間に福音を分かち合ったことで、私自身の母が永遠の生命を受ける機会にあずかることができるようになろうと、どうして知り得ただろうか。

私たちには知らないことが数多くあるが、天父はすべてを御存知である。それ故、天父の命令に従うことは私たちの義務であり、命令に従っていく限り必ずや永遠にわたって祝福を受けるであろう。

※車を持っている何人かが集まってグループを作り、その中のひとりの車で他の何人かを乗せて目的地まで送迎する取決め。車の燃料節約などのために英、米、カナダで広く行なわれている習慣。

あんそく日

安息日を覚えて、これを聖とせよ。六日のあいだ働いてあなたのすべてのわざをせよ。七日目はあなたの神、主の安息であるから、なんのわざをもしてはならない。……主は六日のうちに、天と地と海と、その中のすべてのものを造って、七日目に休まれたからである。それで主は安息日を祝福して聖とされた。

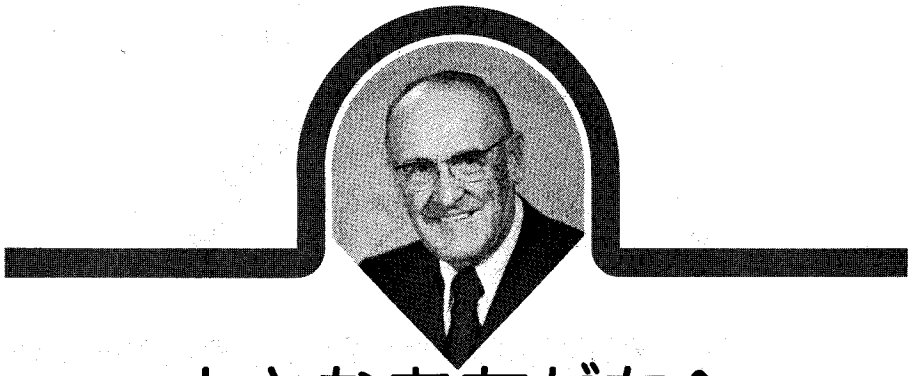
（出エジプト20：8－11）

子どものころのことで、とくに心にのこっているのは、安そく日のことです。私の家では、日よう日はほかの日と、ぜんぜんちがっていました。月よう日から土よう日までは、人も動物も、生活のためにいっしょうけんめい体を動かして働きました。

でも、日よう日はべつでした。日よう日は安息の日であり、休息の日でした。そして、主の日でした。土よう日の夜私たちは馬を草地にはなし、しごとをぜんぶとちゅうでやめました。また土よう日は、日よう日にそなえて、家のそうじをし、ひつようなものをそろえ、身じたくする日でした。週のさいごのしごとは、……「土よう日のおふろ」でした。そのあと、私たちは、日よう日のために母がつくろって、きれいに洗たくしてくれた、ようふくをそろえました。……

日よう日は、一番のぞましい生活をする日でした。私たちは、一番よいようふくを着、一番よい本を読み、親しい人々といっしょにすごしました。そして、仕事のことはわすれて祈りの家へ行き、心を高めて、神さまのあることを理かいしようと、どりょくしました。

スターリング・W・シル長老



小さなお友だちへ

正直でありなさい

十二使徒評議員会補助
O・レスリー・ストーン

私たちはみんな、正直になることができます。正直になると、人からしんらいされます。正直は、とてもたいせつなことなので、天のお父さまは、十戒の中にも、このことをお入れになりました。

「ぬすんではならない。」

お金や物をぬすむのだけが、ぬすみではありません。しごとをしないで給料をもらえば、会社から時間とお金をぬすんでいることになります。1日に30分、しごとをなまけると、1年では3週間以上も、なまけることになります。

正直というのは、言ったことを行なうこと、ことばと生活が、いっちしていることです。もうけたお金の10パーセントを什分の一として主におさめることも、正直のひとつです。

私は、6さいのとき、よいけいけんをしました。父が農場を売って、アイダホ州のドリッグスに雑貨屋をひらき、そこのけいえい者になったのです。そして、しばらくたったある日のこと、木の手おけにつまったキャンデーが、山ほどとどきました。ある朝、店に行ってみると、これからキャンデー・ケースにキャンデーをうつすところらしく、手おけのふたが、みんなあいていました。

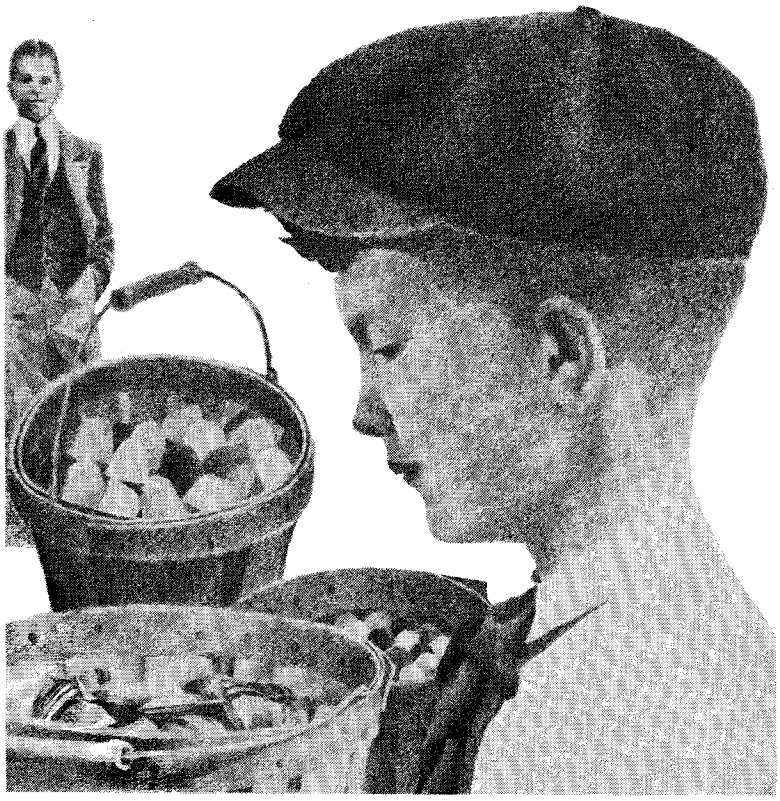
キャンディーはどれもみんなおいしそうでした。私は、ゆうわくにまけて、少しとって、ポケットに入れました。でも店を出るには、父がはたらいているところを、通らなければなりませんでした。父は、私のポケットに目をとめると、私のかたに手をおいて、うら手にあるへやにつれて行き、正直のたいせつさについて、話してくれました。

そして、父は、ポケットをからにするように言い、その店は半分しか自分のものではないこと、家族が店のものをもっていくときには、お金をはらわなければならないことを、せつめいしてくれました。もし、お金をはらわないで、もっていけば、父といっしょに働いている人のものを、ぬすんだことになるのです。

さいきん、私はストーン姉妹と、まごのアダムといっしょに、カリフォルニアへ行きました。お昼ごろ、昼食をとろうと、ある店に立ちよりました。ウエイトレスが、かんじょう書きをもってきましたが、私はそれにあまり注意しませんでした。しかし、おつりをもらったあとで、3つ注文したのに、2つ分しかせいきゅうされなかったことに、気づきました。

店をしまうときに、そのウエイトレスはお金の不足に気づくに、ちがいありません。そのとき、私は、父がどのようにして正直を教えてくれたかを、ふと思い出しました。そして、これはアダムに正直を教えるのに、ちょうどよいきかいだと思いました。私たちはせきに着き、そのことをせつめいしました。私はアダム

に、こまったねと言いました。
私は言いました。このおつりを、このままもらっておいても、だれも気がつかないだろう。でも、サンドイッチをひとつ、よけいにもらっていますよって、おねえさんに言ってあげることも、できるんだ。自分のものではないお金をもらってしまえば、「ぬすんでは、ならない」という戒めをやぶることになると考えれば、どうするかを決めるのは、かんたんだ。自分が正直ではないと思いながら生活するのでは、天のお父さまも、およろこびにならないし、私たちも不幸だと思うよ。
アダムと私は、カウンターの少女のところへ行って、よけいにおつりをもらったこと、もう1ドルはらわなければいけないことを、せつめいしました。すると少女は、ぱっと赤くなって、一しゅんまごついてしまいましたが、まちがいを教えてくれたことを、私たちにかんしゃしました。私たちは、よい気持で、旅行をつづけました。きっと、天のお父さまも、私たちのしたことを、よろこんでくださったと思います。
小さなことに正直になることを学ぶならば、それがしゅうかんになって、大きなことにぶつかっても、正直になれることでしょう。私は、これまでのあいだ、ずっと、たくさんのお金をまかせられてきました。私の正直をしんらいしてくださった人びとを、けっしてがっかりさせたりしなかったことを、かんしゃしています。もし私が不正直だったら、私には成長のきかいも、高い地位につくきかいも、来なかったでしょう。
シェイクスピアという人は、次のような、すばらしいアドバイスをしています。みなさんが、このアドバイスを、いつも心にとめておくことができるように、お祈りします。
「いちばん大事なことは、自分に正直にということだ。そうすれば、かならず、昼のあとに夜が来るように、他人にも正直にならないわけには、いかないのさ。」



こうふくの木

おはなし：エバ・グレゴリー・ド・ピミェンタ
え　　：ジェームズ・クリステンセン

高く、やさしく、あしぶえの音が聞こえてきます。ひつじかいのアドリアンが、ふいているのです。でも、ふえの音は、なぜか、さびしげでした。

アドリアンは、遠くつづく広い道をながめながら、考えました。町は、どんなにすばらしいだろう。どんなにうつくしいだろう。行きたいなあ。

ふえは、いつしか口から、はなれていました。

谷間には、むらさきのかげがおち、空はオレンジ色に、そしてピンクにかわりました。

だいじそうに、ふえをしまいながら、アドリアンはつぶやきました。町のコンサート・ホールに行ってみたい。

ごつごつの手にならないうちに、バイオリンにさわれるかなあ。

ひつじをつれて、村に帰ってきたときは、もうくらくなっていました。歩きながら、ふと顔を上げると、おばあさんが、とぼとぼと同じ道を歩いています。

「こんばんは」アドリアンはいいました。

「こんばんは」　おばあさんは、はのぬけた口で、わらいました。大きな金の耳わ。ジプシーです。おばあさんは、ショールも、うわぎももっていません。

「夜になったら、こまるでしょう。ぼくの家にとまりませんか。」

「ごしんせつは、ありがたいが、わしはきらわれものじゃからのう。」

「だいじょうぶ。ぼくの家は、まずしいけれど、お父さんも、お母さんも、しんせつだもの。」

おばあさんは、じっとアドリアンを見て、いいました。「あんたは、わしがずっとさがしていた人かも知れん。」

アドリアンは、ひつじをかこいの中に入れてしまうと、お母さんにいいました。

「お母さん、この人、たびでつかれているんだ、とめてあげて。」

「ようこそ」　お母さんは、にっこりとしていいました。お父さんも、にこにこしながら、おばあさんをむかえました。

みんなが家に入ると、もうトルティラ（トウモロコシパン）が、やけていました。

「どうぞ、やわらかいですよ。」アドリアンは、おばあさんに、やさしくトルティラを、さし出しました。おばあさんの、日にやけてしわだらけのほほには、なみだがつたっていました。

「ありがとうよ。なんてやさしいんじゃろう。おまえさんこそ、わしが長いこと、さがしていたお人じゃ。」

おばあさんは、そういって、紙につつんだものを、とり出しました。

「これはの、こうふくの木のたねじゃ。」おばあさんはいいました。

「どうして、ぼくにくれるの。」

「おまえさんのほかには、これをかしこく、つかえる人間がおらんからじゃ。わしは、おまえさんを、長いことさがしていたんじゃよ。」

「ぼく、このたねで、ゆうめいになれるの。ねえ、お金もちになれるの。」アドリアンは聞きました。でも、おばあさんは、なにもかも知っているように、にっこりとほほえんだだけでした。

おばあさんは、町のコンサート・ホールのことを話してくれました。

……あちこちに、あかりがキラキラかがやいて、とても明るいんじゃ。いすは、みんな、まっ赤なビロード、きれいにきかざった男や女が、オーケストラがは

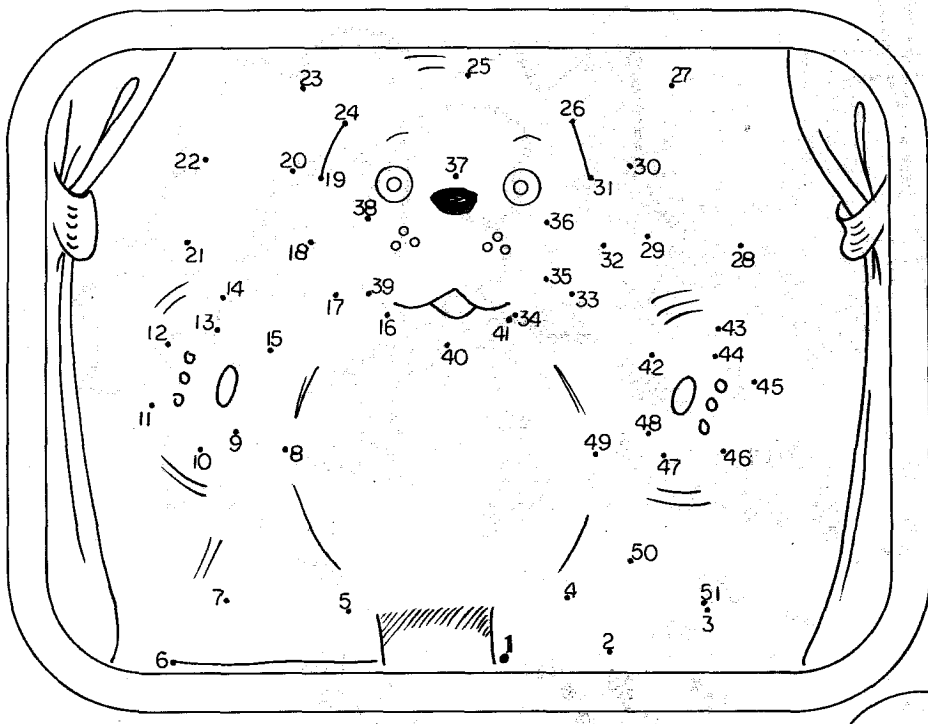
じまるまで、ペチャペチャしゃべっているんじゃ。…
アドリアンは、ゆめ見ごこちで、自分がどこにいるのか、わすれていました。
「セニョーラ、ずっと家にいてくださいな。」 お母さんはいいました。
「そうだよ、ずっといて、ね。」
でも、おばあさんは首をよこにふりました。「たびがあるでの。こうふくの木を見て、わしを思い出しておくれ。」

つぎの日、おばあさんが行ってしまうと、アドリアンは、おばあさんにいわれたとおりに、たねをうえました。たねはめを出し、どんどん大きくなりました。アドリアンは、1日のしごとがおわると、いつも、こうふくの木の下で、ふえをふきました。
なん日かたちました。……するとどうでしょう。金色のはん点のついた、まっ赤な花が、いっぱいさいたのです。道を行く人は、みんなこの花に目を見はりました。ほんとうに、ふしぎな木でした。ほかの木は、みんなかれているのに、この木だけは、葉が青々としげって、花をさかせているのです。

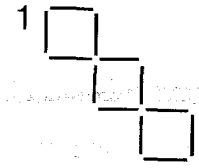
でも、アドリアンは思いました。ぼくは、ゆうめいになれるのかしら、お金もちになれるかしら……。
いく日かたつと、花はかれて、たねができました。
ある日のことです。
「おい！」
アドリアンは、立ちどまって、おじぎをしました。大じぬしの、ドン・ポーフィーリョです。
「おまえたちの、土地を買いたい。行って、おやじにそういえ。」
「ぼくたちの土地はやせていて、なんにもなりませんよ。それに、売ることなんか、できません。」 アドリアンは、わらいながらいいました。
「おれは、その木がほしいんだ。おれに売れ。」
「それなら、たねをあげましょう。」
「おれは、木がほしいんだ。」
アドリアンは、わけがわかりませんでした。
「じゃあ、めが出たら、あげますよ。」
「ばか！」 ドン・ポーフィーリョは、アドリアンの手から、たねをはらいおとしました。「おれは、その木をおれだけのものにしたいんだ。ほかのやつが、もっているものなんぞ、いるものか。」
ドン・ポーフィーリョは、馬をかって、風のようにきえていって、しまいました。
アドリアンは、思いました。お金もちなんて、こうふくじゃないんだな。ドン・ポーフィーリョは、お金もちだけど、心はみすぼらしくて、わがままだ。
アドリアンは、いいことを思いつきました。

（9月号につづく）

てんをむすんでみましょう。ロバータ・L・フェアオール



1



12本のぼうで、正方形が3つできています。ぼうを4本うごかして、正方形を4つにしてくださ

2

16本のぼうで、正方形が5つできています。ぼうを2本うごかして、正方形を4つにしてください。

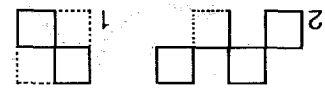
おもちゃばこ

アイス・ホッケー・ゲーム

ロバータ・L・フェアオール

うまく、いれられるかな。

「いやあ、こいつ動物園でねちゃってねえ。しんせつなお母さんが、おくってくれたんだ。」



1から75までのてんを
むすんでみましょう。
何がいるのかな？

狼の遠吠え

ウェンデル・J・アシュトン

私は幼少の頃ロッキーの山ふところに抱かれて育ったが、私たちが一番恐れていたのはコヨーテの襲撃だった。凍てつく冬の夜など、遠吠えが聞こえてくると、柵のついたベッドにもぐりこんで頭まで毛布をかぶりながら外の様子をうかがっていたものである。

しかし、コヨーテよりももっと恐れられていたのは狼だった。狼は時代を問わず人々に嫌われてきた。古代ギリシャ、ローマの作家で、どう猛で凶悪な獣として狼を取り上げた人は60人を下らない。古代ギリシャの時代にはもうすでに狼を仕留めた者に対して報奨金が与えられている。犬の首輪は、元はと言えば狼の攻撃から身を守るためのものであった。ある詩人は狼の遠吠えを「流血の歌」と称したほどである。

先日、ニューヨークにあるアメリカ博物学館が「狼の日」を宣言した。その日博物学館では灰毛でジェスロという名の飼いならされた狼が、ニュースカメラマンたちを前にして羊のようにおとなしく、美しい女性たちと戯れたりポーズをとったりしていた。また博物学館の講堂では、カナダと合衆国両国の動物学者によって収録された狼の鳴き声のアルバムが放送されていた。また、ニューヨーク・タイムズの著名な音楽評論家ハロルド・C・ショーンバーグによる、狼に関する論評までもあった。

カナダ政府の野生動物担当の職にあるC・H・D・クラークは、オンタリオ州スー・サン・マリーに住んでいた故ジム・カランが、オンタリオ内で狼にかまれた者全員に対して永続的な補償をすることを発表したと報告している。しかしこの補償が請求されたことは一度もなかった。

狼の鳴き声に関する権威者であり、オンタリオ州のウォータールー大学生態学助教授であるジョン・B・シバーグは、狼の遠吠えは決して人々を驚かせるものではないと断定している。遠吠えは群れの仲間との伝達手段であり、音色はそれぞれ異なっている。子供を失ったとき吠える遠吠えは、寂しさを表わしていることが多いとのことである。

「狼の日」に関する記事を読んでから、私は狼について少し調べてみた。狼は家族を愛する動物である。生涯の伴侶を得ると、終生その連れ合いと子供に対して誠実である。夫婦には普通3頭から8頭の子供がおり、親は子供が完全に成長するまで愛情をもって育てるが、子供が成長しても親子関係がそのまま続く場合がよく見られる。また、家族の中で1頭でもわなにかかったとすると、身内の狼はわなの所に戻るという習性を持っている。ある雌の狼は16日もかかって連れ合いがわなにかかった場所に引き返し、とうとう最後にはその狼自身もわなにかかってしまったという。狼は子供には忍耐強いが、逆らう子供を甘やかしはしない。狼は穏和な動物であり、仲間同士で争うことは滅多にない。

合衆国魚類および野生動物協会で44年間を過ごし、その多くを狼の追跡調査に費やしたスタンレー・ヤングは次のように書いている。

「北アメリカ全土に生息する食肉動物の中で最も頭のよい狼（犬属）に、私が関心と尊敬と、果ては愛をも抱くようになったのは50年前からである。」（*The Last of the Loners*〔ニューヨーク・マクミラン社　1970〕P.305）

狼のことを詳しく知るにつれて、私は狼の遠吠えが私たちの人生と非常によく似ていることを確信するようになった。私たちはよく知らないために人や物事を恐れることが多くある。

確かに、ヤコブも長い間行方の知れなかった自分の息子に会いにエジプトの地に下って行くことを恐れた。ベエルシバで主はヤコブに言っておられる。「わたしは神、あなたの父の神である。エジプトに下るのを恐れてはならない。わたしはあそこであなたを大いなる国民にする。」（創世46：3）　イサクが誕生する前にも主はアブラハムにこう言われた。「アブラハムよ恐れてはならない。わたしはあなたの盾である。」（創世15：1）

主がこの大いなる血統を私たちに与えて下さった理由のひとつは、私たちに恐れを捨てさせようとされたからであろう。「神の栄光は英智なり」（教義と聖約93：36）とあるからである。

人を恐れるのか。では、主についてもっと知ろうではないか。癌が恐ろしい。では癌についてもっと知ろうではないか。そして癌と闘おうではないか。死が恐ろしい。それでは永遠についてさらに学ぼうではないか。

モルモン経は神のみ言葉

十二使徒評議員会会長
エズラ・タフト・ベンソン

私は今日、極めて重要なテーマに基づいて話したいと思う。私たち末日聖徒イエス・キリスト教会の会員は、モルモン経を神のみ言葉であると信じている。(信仰箇条第8条) 神はそのように宣言しておられ、モルモン経の記録者たちも、モルモン経の見証者たちもそのことを宣言している。また、モルモン経を読んで、それが真実の書物であるという啓示を神から受けた人々もみなそのように宣言している。

教義と聖約第20章の中で、主は、「モルモン経を翻訳するために天より能力を彼(ジョセフ・スミス)に与えたり。この書の中には……イエス・キリストの完全なる福音を載せたり。またこの書は霊感によりて与えられ……」(教義と聖約20:8−10)と告げておられる。

予言者であり、モルモン経の記録者のひとりであったニーファイは、この書物には「キリストの言葉」が記されていると証している。(IIニーファイ33:10) また最後の記録者であるモロナイも、「これらのことが真実である」と証を述べている。(モロナイ7:35)

この現代に、天使として神から遣わされ、三人の見証者にこれらの古代の記録を見せた人こそ、ほかならぬこのモロナイである。三人の見証者の証言もモルモン経中に記されている。「われわれは神の御声が明らかに告げたもうたから、神の賜と能力によってこの記録が翻訳されたことも知っている。それであるから、われわれはこの経典が真理であることが確に解るのである。」

神の指示を受けてこの記録を翻訳した予言者ジョセフ・スミスも次のように証している。「モルモン経はこの地上において最も正確な書物であり、私たちの宗教のかなめ石であって、人がその教えに従って最も神に近づくことのできる書物である。」(*History of The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints*「末日聖徒イエス・キリスト教会歴史」,4:461)

モルモン経は今日の私たちのために書かれたものであり、その著者は神である。これは堕落した民の記録で、神より霊感を受けた人々が今日の私たちに恵みをもたらすために編纂したものである。当時の民がこの書物を読むことはなかった。なぜなら、これは私たちのために備えられたものだからである。

古代の予言者モルモンは、何世紀にもわたって、書き留められてきた記録をつづめ書きしてこの書物のもととなった記録を作った。そのためこの書物は彼の名にちなんでモルモン経と呼ばれている。初めから終りに至るまですべてのことを御存知である神は、今日の私たちが心要とする事柄をモルモンに告げ、それをそのつづめ書きの中に入れさせたもうたのであった。やがてモルモンは、最後の記録者である息子モロナイにその記録を託した。そしてモロナイは、1,500年以上も前に書きながら、今日の私たちに対して次のように述べている。「見よ、私はあなたたちが今目の前にあるかのように話しているが、本当はあなたたちはまだ生れないのである。しかし、イエス・キリストが前以てあなたたちを私に見せたもうたのであなたたちの行いが今私に解るのである。」(モルモン8:35)

モルモン経が世に現わされた目的は、表題の頁にあるように、「ユダヤ人と異邦人とにイエスは永遠の神なるキリストにましまして、万国の民に現われたもうことを確信させる」ことである。

モルモン経の最初の記録者である予言者ニーファイはこう語っている。「私が一心に志すところは、すべての人がアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神のところへきて救われることを、かれらに説いて信じさせることである。

それであるから、私は俗世間に喜ばれることを書かないで、神と俗世間の仲間でない者を喜ばせることを書く。

であるから、私は私の子孫に人間にとってねうちのないことでこの版をふさいではならぬと命じよう。」(Iニーファイ6:4−6)

モルモン経はふたつの方法をもって人々をキリストのもとに導いている。そのひとつは、キリストとその福音について率直に告げる方法である。モルモン経はイエス・キリストが神であり、私たちには贖い主が必要であり、また主に信頼を置くことも必要であることを証している。さらにモルモン経は、堕落と贖罪と福音の第一原則についても証している。その中には、へりくだりたる心と悔いる精神を持つことと、みたまによって生まれることの必要性も説かれている。また、私たちは正義を守って終りまで堪え忍び、聖徒として徳高い生活を送らなければならないと、モルモン経は告げている。

第2は、キリストの敵をあばく方法である。モルモン経は偽りの教義を打ち破り、争論を鎮めるものである。(II

ニーファイ3：12参照）　またそれは、謙遜にキリストに従う者たちが、今日の悪魔の企てや戦略、その教えに頑強に対抗できるよう力を与えるものである。モルモン経中の背教者のタイプは、今日のそれによく似ている。私たちが誤りを見抜き、今日の誤った教育や政治、宗教、哲学等の概念といかに戦ったらよいかその方法を知ることができるように、神は実に無限の先見の明をもってモルモン経を備えられたのである。

神は私たちに、モルモン経をいろいろに活用するよう期待しておられる。私たちは祈りの気持ちをもって丹念に読むと同時に、読みながらこの書物が神の備えられた経典か、それとも無学な若者の創作によるものか、深く思いめぐらすことが大切である。そしてこの書物に書かれていることを読み終えたら、モロナイが勧めているように、これらの言葉を試してみなければならない。

「またこの記録を受ける時、それが真実なものかどうかをキリストの御名によって永遠の父なる神に問え。もし誠心誠意でその上キリストを信じながら問うならば、神は聖霊の力によってこの記録が確かなものであることをあなたたちに示したもうにちがいない。」（モロナイ10：4）私はモロナイの勧めに従ってみた。そのことであなた方に証したい。この書物は確かに神が備えられたものであり、まことに真実のものである。

私たちはまた、福音の教えの基としてモルモン経を使わなければならない。教義と聖約第42章で、主は次のように言っておられる。「また当教会の長老、祭司および教師たちは……完全なる福音を載せたるモルモン経とに誌されたるわが福音の原則を教うべし。」（教義と聖約42：12）

モルモン経を読み、それについて教えるときには、その聖句が「私たちの学問の利益になるように」、見立てる必要がある。（Ⅰニーファイ19：23）

また、教会に反対する人々に対処するときにも、モルモン経を使わなければならない。父なる神とその御子イエス・キリストは、驚嘆すべき示現のうちに、ジョセフ・スミスのもとを訪れたもうた。その栄えある出来事の後、ジョセフ・スミスはそのことをひとりの牧師に語った。ところが驚いたことに、その牧師は、今の時代に示現だの啓示だのというようなことはない、このようなことはすべて過去のことだと言って、ジョセフ・スミスをあざけったのであった。（ジョセフ・スミス2：21参照）

この言葉は、非教会員や異論をもつ会員が教会に対して投げかける反論を象徴するものである。言い換えれば彼らは、神が予言者たちを通して今日も教会にそのみこころを示されるという事実を信じていないのである。堕胎であろうが、多妻結婚であろうが、あるいは安息日の曜日の問題であろうが、反論を招くものはすべて基本的に、ジョセフ・スミスとその後継者が実際に神から啓示を受ける予言者か否かという点に帰着する。次にモルモン経を使って、多くの反論をどのように処理すればよいか、その手順を示そう。

まず第1に、反論されている事柄について理解する。

第2に、啓示からその答えを出す。

第3に、その答えがどれほど正しいものであるかは、啓示が現代の予言者を通じて与えられるか否かにかかっていることを示す。

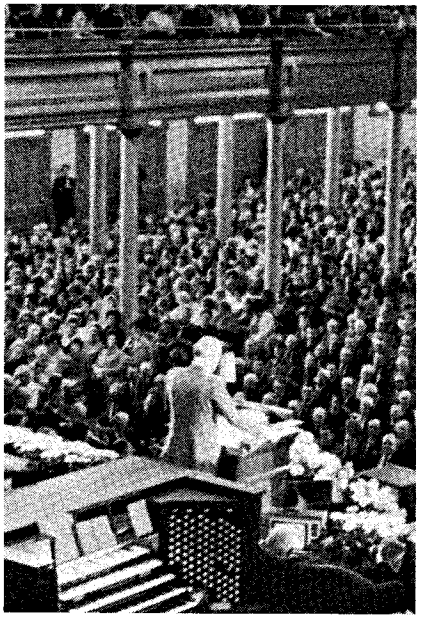
第4に、現代の予言者と啓示の有無は、モルモン経が真実か否かにすべてがかかっていることを説明する。

従って、反対者が解決しなければならない問題はただ一つ、モルモン経が真実か否かである。もしモルモン経が真実の書物であるならば、イエスはキリストであり、ジョセフ・スミスは予言者であり、また末日聖徒イエス・キリスト教会は真の教会であって、この教会は今日予言者が啓示を受けて導いていることになる。

私たちの主要な務めは福音を宣べ伝えることである。しかも、有効に宣べ伝えることである。私たちはすべての反論に答える義務はない。人はみな信仰をもって物事を決しなければならない状態にいつかは置かれる。そのとき彼は何事も自分自身で決しなければならない。ニーファイは次のように語っている。「あなたたちがもしもこの言葉がキリストの言葉でないと思っても、終りの日になってキリストは能力と大きな栄光とを以てそれがキリストの言葉であることをあなたたちに認めさせたもう。そのときにあなたたちと私とはキリストの法廷で対面する。そうすれば、あなたたちは私が弱い者であるのにこれらの事を書けとキリストから言われたことを知るであろう。」（Ⅱニーファイ33：11）　人はみな、神から責任を問われるのを知って、自らを裁くにちがいない。

モルモンは「イスライルの家に属する……民の旗」となり、その言葉は「世界の隅々までも響き」わたると主は告げておられる。（Ⅱニーファイ29：2）私たち教会員は、特に宣教師は、このモルモン経を世界の隅々までも響きわたらせ、証する者とならなければならない。

モルモン経は私たちの掲げる偉大な旗である。それはジョセフ・スミスが予言者であったことを示し、キリストのみ言葉を告げるものである。そしてモルモン経のもつ大きな使命は、人々をキリストのもとに導くことである。その他の事柄はすべて第二義的なものである。「あなたはキリストについてもっと知りたいですか」というのが、モルモン経の黄金の質問である。モルモン経によって立派な求道者が見つかる。それには「俗世間に喜ばれること」は書



かれていない。従って、世俗的な生活を追う人々はモルモン経に関心を示さない。この書物は実に人々をえりわける大きなふるいである。

モルモン経の教義と教えを一生懸命に学び、またこれを誠実に伝道の業に用いている人は、ユダヤ人と異邦人とレーマン人に私たちの告げるメッセージが真実なものであることを確信させるために、神がこの書物を伝道の道具として宣教師に与えておられることをその心に強く感じるにちがいない。

ところが私たちは、十分にモルモン経を活用していない。もしも私たちがそれを用いて子供たちをキリストのもとへ導かなければ、家庭は堅固なものとならないだろう。また、この書物を使って社会主義や進化論、合理主義、人文主義などの中に見られる偽りを明らかにし、それに対抗するすべを知らなければ、私たちの家族は世の流行や教えに打ち負かされてしまうかもしれない。宣教師はモルモン経を携えて宣べ伝えなければ、耳を傾ける者はいないだろう。この教会で得られる社交に引かれ、あるいは倫理や教養や教育がきっかけとなって教会に入ってきた改宗者は、モルモン経に記されている完全な福音にまでその根を下ろさなければ、真昼の日の光に枯れしぼんでしまうことだろう。またモルモン経を旗として掲げなければ、福音を教えるクラスは霊的に満たされないところとなってしまうであろう。さらに、イエス・キリストのみ言葉を読んでそれを心に留め、秘密結社が生まれ存続しないように努めない限り、国家はしだいに衰退するようになる。モルモン経が告げているように、過去のアメリカの文明は秘密結社のために滅びたのであった。

かつてある宣教師たちは、伝道の帰途、モルモン経を軽々しく扱ったために、教義と聖約第84章にあるように、主の叱責を受けた。そうした行為の結果、彼らの心は暗くなっていた。主が語っておられるように、モルモン経を軽んじる行為は、全教会を、またシオンの子らをさえ呪いの下に置いたのである。続いて主は言っておられる。「されば人々悔い改めて、新なる誓約すなわちモルモン経と先にわが与えたる以前の誓約とを思い起こして、ただにこれを口にするのみならず、またわが誌したる所に従いてこれを実行するまで依然この咀いの下にあるべし。」（教義と聖約84：54－57参照）私たちは今なおこの呪いの下にとどまってはいないだろうか。

モルモン経を読む人は、伝道に出たいという気持ちを抱くにちがいない。現在私たちはもっと多くの宣教師を必要としている。しかし同時に私たちが必要としているのは、モルモン経についてよく知っており、それを愛読している人々の所属するワード部や支部や家庭から出る、よく準備の整った宣教師である。このような宣教師がモルモン経を携えて集会を開き、福音を教える、大きなチャレンジと準備の日は間近に迫っている。私たちは福音のメッセージを宣べ伝えるにふさわしい宣教師を必要としているのである。

全くのところ、結果は私たちがモルモン経にどのように応じるかにかかっている。主は言っておられる。「信仰をしてこれを受け入れ義しき行為をなす人々は永遠の生命の栄冠を受くべし。

されど信ぜずして心を頑固にし、これを受け入れざる人々はこのこと己れらが罪せらるる所以となるべし。

何となれば、これを主なる神語りたまいたればなり。」（教義と聖約20：14－16）

モルモン経は真実の書物だろうか。然り。

それはだれのための書物だろうか。私たちのためのものである。

その目的は何か。人々をキリストのもとに導くことである。

それはどのようにして行なわれるだろうか。キリストについて証し、キリストの敵対者をあばく。

私たちはモルモン経をどのように使えるだろうか。この書物について証し、これを使って教え、これを旗として掲げ、伝え広める。

私たちはこのことを行なってきただろうか。まだまだ十分ではない。

永遠の結果は、この書物に対する私たちの態度にかかっていると言えるだろうか。然り、祝福も呪いもそれにかかっている。

末日聖徒はすべて、生涯この書物を学び続けるべきである。さもなければ、自らの魂を危険にさらし、霊的かつ知的な一致をもたらすものをなおざりにしていることになる。確かに、モルモン経を読んでキリストの岩を基にして立ち、鉄の棒をしっかり握っている改宗者と、そうでない改宗者との間には大きな相違がある。

四半世紀前、ある教会幹部がこのタバナクルで次のように語った。「私が弁護士を開業しようとしたときのことである。私の家族はそのことをあまり快く思わなかった。私が信仰を失うのではないかと恐れたからである。私は弁護士として働きたかったが、それ以上に、自分の証を保ちたいと思っていた。そこでちょっとした実行計画を立てた。あなた方もこれを行なってみたらいかがだろうか。その計画とは、毎朝一日の仕事を始める前に、30分間モルモン経を読むというものだった。……こうして私は一日のうちのわずかな時間を割いてモルモン経を読み続けた。そしてそれは9年間続いた。こうして私は、モルモン経に書かれている事柄に調和した生活を送っていれば、主のみたまとの調和を保つことができることを知った。」（*Conference Report*「大会報告」，1949年4月，P.36）モルモン経は、いかなるものにも劣らず、私を主のみたまに近づけてくれる。先に引用した幹部は、マリオン・G・ロムニー副管長である。私は彼の考えに共感を覚える。

次に、私たちはモルモン経について何を語らなければならないだろうか。この書物は真実の書物であるという自分の証である。私はこのことを、自分が今生きていることを知っているように確かに知っている。かつて予言者ジョセフ・スミスが言ったように、私たちも言うのである。「私は兄弟たちに、モルモン経はこの地上において最も正確な書物であり、私たちの宗教のかなめ石であって、人がその教えに従って神に近づくことのできる書物であると語った」と。

このかなめ石について知り、これを使い、もっと神に近づくことができるように、イエス・キリストのみ名によって祈る。アーメン。

モルモニズムの真髄

七十人最高評議員会会員
ハートマン・レクター・ジュニア

私たちは今、ほとんどの人が物事の確証をつかんでいない世の中に生きている。世界はひとつの理論から他の理論へと飛んで行くことを楽しんでいるようであるが、つい昨日には世界の希望であると考えられ、また思われていた理論が今日には世の害悪となることがしばしばある。妊娠中の不快感を抑えるのに使用される奇跡の薬は、奇形児を生む原因となることが認められた。「戦争を終結するための戦争」が新たな戦争を引き起こすだけに終わっている。私たちは絶えず新しいプログラムを作り出してはその中に解答を求めているようである。しかし、そこに答えを見出すことはできない。私たちは寿命を延ばし、若さを保ち、苦痛を止め、疲労を取り去り、労働を廃止するための妙薬を捜し求めているのである。

当然のことであるが、物事の真実の姿を理解しているならば、私たちが免れようとしている事柄こそ必要なものであることがわかる。苦痛は欠くことのできないものである。「彼は……さまざまの苦しみによって従順を学び」とある。(ヘブル5：8) 熟睡を誘うほどよい疲労は実に心地良いものである。労働の素晴らしさはいくら強調してもし過ぎることはないだろう。困難な仕事を首尾よく成し遂げたときの満足感は、私たちが現世で味わう最高のものである。自分が長年かけて努力してきたことをふり返り、今までの豊富な経験から人生の悟りが開けたことを実感として味わうとき、晩年はその人にとって、まさに豊饒の時となるであろう。

そう、私たちの社会は、幸福をつかもうとして幻想から幻想へと飛び回る。新しいプログラムにはかない望みを抱きながら。しかしどのようなものであれ、プログラム自体に魔法の力はない。

末日聖徒イエス・キリスト教会は、今日多方面で大きな関心を持って見られている。「ナショナル・ジオグラフィク」(1975年4月、PP.440－73) の『聖徒たちが歌い進むとき』の記事は、この教会の様子をほぼ事実通りに伝えている。また、私たちの教会への賛辞の最たるものは、他の教会が私たちの教会のプログラムをまねているということである。家庭の夕べのプログラムは他の教会が手本としているし、同じテキストを使っている教会さえある。彼らには、同一のプログラムを用いれば同じ結果が得られると思っているふしがある。そのようには行かないだろう。末日聖徒イエス・キリスト教会の真髄はそのプログラムにあるのではなく、教義にあるからである。

私には、26年以上にわたって組合教会の牧師をしている非常に立派な友人がいる。彼は、かつてニューヨークのロングアイランドで最も信者の多い教会を所有していた人である。彼はソルトレーク・シティーを訪問し、また自宅に末日聖徒の宣教師の訪問を受けることによって、末日聖徒についてよく知るようになった。彼は教会の素晴らしさに大いに感銘を受けたが、それは主として、そうしたプログラムを通して得られた成果を見たからである。そこで彼はこのプログラムを借用して、自分の教会に採り入れてみようと考え、実行に移してみたが、うまくゆかないことに気づいた。彼はそのことを私に次のように話してくれた。

「モルモニズムの真髄はその教義にあって方法にあるのではないことと、教会にみなぎる活気は、啓示によって授けられたイエス・キリストの回復の福音に対して、それにふさわしい生活をしようと教会員が決心するところに生まれるということに気づいたとき、少なからず動揺した。モルモニズムの実はその真髄をつかまずして得ることができないということは明らかだ。」(ジョン・F・ハイデンライヒ *It may Change Your Ljfe*「人生を変える教え」)

私は、今日同じことを試みている人々が、最終的には私の友人と同じ結論に到達すると確信している。家庭の夕べ、若人の活動、ヤングアダルト、建築、福祉、扶助協会、それぞれのプログラムは、他の教会に何ももたらしはしない。他の教会の発展に寄与することはないのである。それは驚くべき力がプログラム自体にはなく、教義にあるからである。私たちは他の教会のプログラム設定を援助することもできるが、その成功を保証することはできない。

神と私たちの関係について正しい理解と証を持つことは、末日聖徒イエス・キリスト教会のプログラムにおいて成功への土台となるものである。プログラムは、人がどこから来て、なぜここにいるのか、そして現世を終えた後どこへ行くのかを知っている人々にとってのみ、主の霊感を受けたものとなる。つまり、これらの人々は証を持っている人である。言い換えれば、神が

私たちの天父であられることを知っている人は、私たちが天父の形に造られた神の息子、娘であることを知っている。また、神が私たちの天父であられるからこそ、私たちは神を天父と呼び、さらには神に似た者となれるよう天父に助けを求めるのだということを知っている。子は親のようになることを知っているからである。

証のある人は御子イエス・キリストが私たちの長兄であることを知っている。イエスは神である。しかしながらイエスは御父ではなく、神の御子であり、全人類の救い主、贖い主である。そして神と人との仲保者なのである。これには不可思議なことや神秘的なことは全くなく、またいささかの混乱もない。

証のある人は、天父なる神が今日この地上において私たちを導きのない状態に放置してはおかれないということを知っている。そして、主のみ言葉とみ旨、みこころを子供たちに啓示する生ける予言者が与えられているのである。

証のある人は「あらゆる人々主なる神すなわち世の救い主の名によりて語る」ことが、天父の望みたもうことであることを知っている。（教義と聖約1：20） 従って、天父はこの地上において御自身に代わって働く権能を再び人間に与えたもうたのである。そして、神権と呼ばれるこの権能によって、人はバプテスマを施し、聖霊の賜を授けるために手を按き、病人を癒し、悪霊を追い出し、新しい言葉を語ることができる。すなわち、イエスが言われたように、信じる者にはしるしが伴うのである。（マルコ16：17－18参照）

また証のある人は、神権と呼ばれるこの同じ権能によって、男女は死がふたりを分かつまでではなく永遠にわたって結ばれるということを知っている。なぜなら、地上でつなぐことは天においてもつながれるからである。（マタイ16：19参照） 男も女も子供も、これらの真理をただ単に信じるのでなく聖霊によって心に深く刻み込まれるとき、主が光と知識と経験のうちに子供たちを成長させるべく、この地上において定めたもうたプログラムは、不死不滅と永遠の生命に至る道にあって人の心に重大な影響を与えるものとなるのである。

プログラムはそれ自体では進行しない。人が動かすのである。まさにマッコンキー長老が語られたように、すべてのプログラムには犠牲が伴う。私たちは神の目的とされることを地上の子供たちにもたらすために、特に望まないことをも永遠にわたって行なわなければならないように思われる。地上にあってもどこにあっても、主のプログラムを成功に導く真の鍵は「犠牲」なのである。

予言者ジョセフ・スミスは次のように語っている。「神が人間を永遠の生命を得る存在として定められたのは人間自らの犠牲によるのであり、それ以外にはない。人は、この世のものをすべて犠牲にして初めて、自分が神の目から見て喜ばしいことを行なっていると知ることができる。

イエス・キリストについて知ることの素晴らしさに比較して、その他のすべてのもの、すなわち、名声や名誉、他人によく思われること、家、土地、兄弟姉妹、妻や子供、そして自らの命さえもどうなってもかまわないと考える人にとっては、神のみこころを行なっているとただ考えるだけでは不十分なのである。明らかな知識が必要である。さらに、これらの苦しみが終わったときに永遠の休息に入り、神の栄光にあずかるという実感を持つ必要がある。（*Lectures on Faith*「信仰講話」P.58）

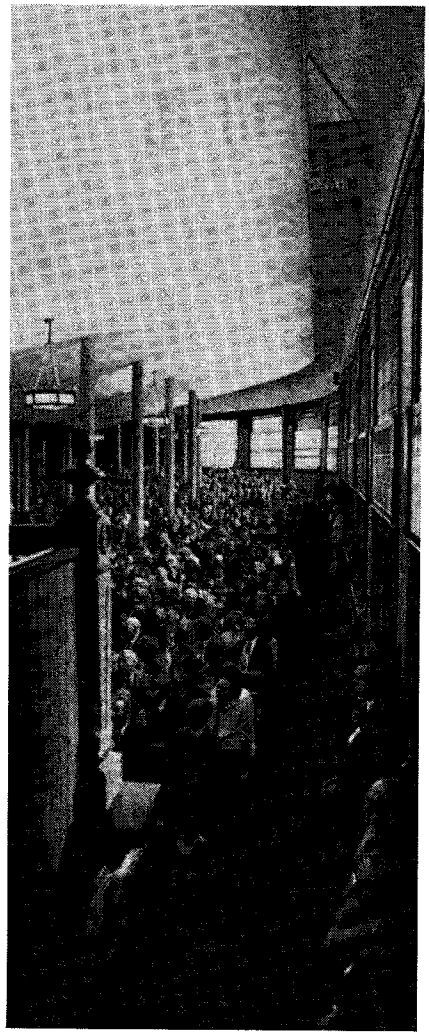
末日聖徒イエス・キリスト教会の教義は、あなた方を決して受け身の立場

には置かない。ジョセフ・スミスは天父なる神と御子とにまみえ、言葉を交わし、全人類のために戒めを受けた。また、神から遣わされた天使モロナイはジョセフのもとを訪れ、古代の記録が刻まれた金版を授けた。その中には、南北アメリカ大陸の古代住民にイエス・キリスト御自身が語られた完全なる福音が記されている。さらに、1829年5月15日、バプテスマのヨハネがこの地上を訪れ、バプテスマを施す権能を回復し、それは神のみこころにかなうものであった。ペテロ、ヤコブ、ヨハネは地上にメルケゼデク神権を回復した。これは、あらゆる儀式を執り行ない、地上において結び固めを行なう権能である。こうして、イエス御自身が行なわれたように、地上でつなぐものは天においてもつながれる。さて、今述べたこれらすべての事柄が真実であるならば、すべての人がそれを知らなければならない。なぜなら、それらはすべて神のあらゆる子供たちへの祝福としてなされたものだからである。

末日聖徒 350万人の多くは、上に述べた主張が真実であることを証している。そのような確証があるからこそ、神の生ける予言者からの指示に従って生きようとするのである。予言者の家庭の夕べを開くようにとの勧告に従い、約50万におよぶ末日聖徒の家族は毎週子供たちを共に集め、主の祝福について語り、また神と隣人、そして家族同士の愛について話し合う。こうして家族共々、慈愛に満ちた天父から祝福を得られる生活をしようと努力するのである。

什分の一はアブラハム以前の時代から今日に至るまで、主のプログラムの中で重要な位置を占めてきた。事実、聖書にはこの永遠の原則を証明する聖句が数多く含まれている。従って、聖書を聖なる記録として受け入れているすべての教会は、この原則に従わなければならないはずである。しかしながら、末日聖徒イエス・キリスト教会を除いては、どの教会もこのことを考慮に入れていない。

なぜ1万9千名を越える若い男女が伝道の召しを受けて、家族のもとを離れ、学校生活を中断し、友人とも別れ



国々へと旅立って行くのだろうか。往往にして、彼らを取り巻く環境が敵意に満ちたものであるというのに。確かに、金銭的な報酬があるわけでもないし(彼らは自費で伝道している)、地位や権威や世の賞賛を得るためでもない。ただ、回復された真理のメッセージ、すなわちモルモニズムの真髄を天父の子供たちに分かち合おうとしているのである。私は尋ねたい。なぜ彼らはそうするのだろうか。それは、彼らが世のあらゆる問題、特に人の心が冷やかになるということに対して答えを持っていると確信しているからである。

イエスが生きておられ、天から再び語られたことは福音であり、良きおとずれである。主は再びこの地上を訪れ、主の教会を完全な状態で設立された。それはまさにペテロの予言通りである。

「だから、自分の罪をぬぐい去っていただくために、悔い改めて本心に立ちかえりなさい。それは、主のみ前から慰めの時がきて、あなたがたのためにあらかじめ定めてあったキリストなるイエスを、神がつかわして下さるためである。

このイエスは、神が聖なる予言者たちの口をとおして、昔から予言しておられた万物更新の時まで、天にとどめておかれねばならなかった。」(使徒3:19－21)

確かに、末日聖徒イエス・キリスト教会のプログラム自体に力や強さがあるのではない。それは教義の中に見出せるのである。人は、モルモニズムの真髄をつかまずしてその実を得ることはできない。その真髄とは、証である。みたまが告げる証である。王国の活動を成功に導くのはプログラムではなく、神について、また神と自らとの関係について心の中に燃えるような確かな知識を身につけた人である。モルモニズムの強さはここにある。

私はこれらのことが真実であると証する。私はそれを知っている。神は私たちの天父であり、生きておられ、祈りを聞き、祈りに答えて下さる。また、イエスはキリストであり、生きてましまし、この教会は真実の教会であることを証する。なぜなら、偉大な予言者ジョセフ・スミスを通してこの時代に地上に主の教会を再び確立されたのは、主御自身だからであり、また今日神の生ける予言者をいただいているからである。

スペンサー・W・キンボールは、まさしく生ける神の予言者であり、神の王国である教会において諸々の事柄を決定し、この大会において行なったように主のみこころとみ旨を宣言する。

予言者に従うことにより、私たちは数え切れないほどの恵みを受け、教会のプログラムは進展することを証する。なぜなら、教会のプログラムは人々に天父や同胞に対する責任を理解させ、また人々は喜んでその責任を果たそうとするからである。これはイエス・キリストが運営するイエス・キリストの教会である。以上のことをイエス・キリストのみ名によって証する。アーメン。

アメリカにおける キリスト

第一副管長
N・エルドン・タナー

先日、南アメリカの国々を訪れ、その地の献身的な聖徒たちの信仰と熱意に触れ、同時にモルモン経の背景となっている地にいるのだとの実感を味わって戻ってきた。そのこともあって、今私はモルモン経について是非話をしたいという気持に駆られている。この書物には、古代のアメリカ大陸の住民が織り成す歴史が記されている。

ブラジルのサンパウロとアルゼンチンのブエノスアイレスにおいて催された地域総大会で、みたまにあふれた数々の会に出席し、大勢の素晴らしい兄弟や姉妹たちと交わった。そして、彼らの純粋な信仰と、主に仕えてこの地上に主の王国を確立したいという大きな望みに、強く心を打たれた。

私たちの予言者であるキンボール大管長が、彼らの中に立ったときに彼らの示した愛、そして大管長が、取り巻く人々に祝福と助言を与えたときに彼らの目にあふれた喜びの涙、これはまことに心温まる光景であった。そのあり様を見ながら、私は、古代のニーファイ人も復活した主の訪れを受けて同じような麗しい経験をしたに違いないと思いめぐらしていた。主は確かに西半球に住む他の羊を訪れたもうたのである。そして彼らは主の羊の群れに入り、主の福音を説き踏み行なうひとつの組織を与えられたのであった。

そのことは、モルモン教の中で、ニーファイ第三書と呼ばれている箇所に記されている。私は今日、このことについて述べたい。しかしその前に、モルモン経の存在が確かであり、必ず世に現われるということを証している予言を聖書からいくつか引用したいと思う。

次にあげるのは、旧約聖書のエゼキエル書の言葉である。「人の子よ、あなたは一本の木を取り、その上に『ユダおよびその友であるイスラエルの子孫のために』と書き、また一本の木を取って、その上に『ヨセフおよびその友であるイスラエルの全家のために』と書け。これはエフライムの木である。あなたはこれらを合わせて、一つの木となせ。これらはあなたの手で一つになる。」（エゼキエル37：16，17）

この書の内容から、これらの木は聖書とモルモン経を指すということがわかる。また、モルモン経がどのようにして世に現われたか知ると、黙示者ヨハネの語った言葉の意味がよく理解できる。すなわち、ひとりの天使が実際に天より下り、モルモン経の翻訳前の記録をジョセフ・スミスに渡したのであった。黙示録には次のように記されている。

「わたしは、もうひとりの御使が中空を飛ぶのを見た。彼は地に住む者、すなわち、あらゆる国民、部族、国語、民族に宣べ伝えるために、永遠の福音をたずさえてきて、大声で言った、「神をおそれ、神に栄光を帰せよ。神のさばきの時がきたからである。天と地と海と水の源とを造られたかたを、伏し拝め。」（黙示14：6，7）

神は世の初めからすべての神の子らに関心を示してこられたが、今日でも同じように私たちに関心を寄せておられる。これを確証する聖句はたくさんある。従って私たちは、この末の日にも神は予言者を通して絶えず啓示を下し、私たちを導かれることを信じている。予言者アモスはこう言っている。「まことに主なる神は、そのしもべである予言者にその隠れた事を示さないでは、何事をもなされない。」（アモス3：7）

救い主は次のように語っておられる。「わたしにはまた、この囲いにいない他の羊がある。わたしは彼らをも導かねばならない。彼らも、わたしの声に聞き従うであろう。そして、ついに一つの群れ、ひとりの羊飼となるであろう。」（ヨハネ10：16）

このことから、救い主が十字架の刑を受けて復活した後、予言されていたしるしと驚異のうちに西半球の民を訪れたもうたわけは明らかである。それは、主はこの世において共に暮らした民に、主の福音を学び、それに従って生活する機会と特権を与えられたが、この西半球の民にも同じ機会と特権を与えるためであった。

この訪れを記したニーファイ第三書の記録以上に、神と人との交わりを美しくかつ詳しく記した記録は、聖典中のどこを捜しても見出せないと思う。私はこの記録を読むようにすべての人に勧めたい。そこには警告の言葉と、美しい教え以外の何ものも見出し得ない。これらの警告と教えを受け入れ、これに従って生活するならば、世の人々や、このような生き方を求めている人に、平安と幸福をもたらす上で、これほど大いなる働きをするものはほかにないであろう。また、聖書では答えることのできない数多くの疑問に対しても、適確な解答を得ることができる。

ニーファイ第三書は、新約聖書の4つの福音書よりも詳細に、多くの知識

を提供してくれる。さらにそこには、主の教義と教えが保たれており、主の慈悲深い業が記録されている。この理由から、多くの人々はニーファイ第三書を「第5の福音書」と呼んでいる。

このニーファイ第三書は、キリストの誕生を告げる予言の記事で始まる。しかし、世の始めからその時に至るまで、また今日においても見られるように、その予言をあざけり、予言者の言葉が成就する時はすでに過ぎたと言う者たちが多かった。そして彼らはある一日を定めて、その日までに予言されたしるしが現われなければ、信じる者たちをすべて殺すことにしたのである。

そのことでニーファイは「熱心に主に祈りを捧げた。」（Ⅲニーファイ1：12）それに対して主はニーファイのもとを訪れ聖なる予言者たちの告げたことが成就する時は、間近であると答えられた。こうしてすべてのしるしが現われ、新しい星が空に出たので、予言を信じなかった者たちは「地に倒れて死んだようになった。」（Ⅲニーファイ1：16）ここに私たちの学ぶべき第一の教訓がある。つまり神の予言者の言葉は必ず成就するのである。

しかし、民は間もなく、自分たちの経験したしるしと驚異をすべて忘れてしまい、悪事にふけるようになった。そして戦いがあり、ガデアントン強盗団がおこり、国が荒廃し始めた。そのような中で、正義を守って主を呼び求めたニーファイ人たちは彼らの敵を打ち負かすことができた。そして自分たちの救われたことについて神を賛美したのである。

記録にあるように、彼らは「かれらの罪や憎むべき行いやみだらな行いをことごとく捨てて夜昼熱心に神に仕えた。」（Ⅲニーファイ5：3）　こうして彼らは栄えた。

「多くの都市が新しく建てられ、多くの古い都市が修理され、都市から都市へ、地方から地方へ、また所から所へ行く多くの街道が開通された。」）Ⅲニーファイ6：7，8）

このように、モルモン経の記録は、この地方に古代文明が栄えていたことを証拠立てている。学問のない一介の若者が神の賜と力とによって翻訳したモルモン経は、現在科学が証明しつつある事柄を、非常に詳細かつ生き生きと描写しているのである。

まことにこれは、この末の日に世に出されるよう神のみ手によって守られてきた真実の記録である。

話をもとに戻そう。今日の世でもそうであるが、民は繁栄すると高慢になり、論争を始めた。そしてある者たちは故意に神に逆らった。この結果、わずか6年の間に民の大部分は邪悪に陥ってしまった　そこでニーファイは伝道を始め、勇敢に悔改めを説いた。

悔改めを説くこと、これは神の予言者の務めである。たとえ受け入れられなくても、行なわなければならない義務である。民はニーファイに対して怒ったが、彼は威勢と大きな権能とをもって教えと導きを与えた。

「ニーファイがその主イエス・キリストを信ずる信仰は非常に深くまた固かったから、天使たちが毎日ニーファイに導きと恵みとを与え……

ニーファイは、イエスの御名によって悪鬼と汚れた霊とを追い出し、その上民のために石で打ち殺された自分の兄弟を蘇生させた。」（Ⅲニーファイ7：18，19）

その後再び、予言者たちの予言したように、キリストが十字架にかかりたもうたことのしるしが現われ、嵐や地震、暗黒、雷、火がその出来事の証として起こった。多くの都市が海中に没し、山々が隆起し、地の全面にわたってその様相が変わった。これは3日間続き、「ある所では民が『この大きな恐ろしい時が来ない前に悔い改めておけばよかったものを。悔い改めておいたならば、わが兄弟たちは命を助けられて大きな都ゼラヘムラで焼け死ななかったものを』と泣き叫ぶのが聞えた。

またほかの所では民が『この大きな恐ろしい時が来ない前に、悔改めをして予言者らを殺さず、石でこれを撃たず、また追い出さなければよかったものを。このようなことをしなかったならば、われらの母や美しい娘や息子たちは命を助けられて、大きな都モロナイハ市で生き埋めにされることはなかったものを』と泣き叫んでひどく悲しむ声が聞えた。このように、民の歎きとうめきとはまことに甚しくまた恐ろしいものであった。」（Ⅲニーファイ8：24，25）

明らかにこれもひとつの教訓である。過去の歴史を見ると、予言者を拒み、邪悪な行ないを悔い改めようとしなかった者たちは惨禍を被り、予言者の警告を心に留めなかったことを嘆き悲しみ、後悔している。御存知のように、主の使徒たちも、神の王国を築き、民を悔い改めさせて幸せな生活に入らせようと努めたというだけで迫害を受け、石で撃たれたのである。

今日の世の人々は、神の予言者の言葉を拒んでいる。人々は戦争を繰り返しているが、そのことで嘆き悲しむ出来事が地の面を覆っているとは言えないだろうか。また、若人が義の道をそれて、アルコールやタバコ、幻覚剤、その他禁じられたものに手を出した結果苦しみに陥り、悲劇を被っていることを、また彼らがいつも気まぐれな行為に走っていることを、大勢の人々が嘆いてはいないだろうか。現在の社会に存在している不法行為を、いかに多くの人々が悲しんでいることだろう。私たちは、姿を消した古代文明のようにならないために、過去の歴史から得た教訓を心に留める必要がある。

キリストはこのことを古代のニーファイ人に告げられ、その声は「地のすべての人々に」聞こえた。（Ⅲニーファイ9：1）主は彼らに民の罪悪と憎むべき行為を思い起こさせ、また住民の邪悪のために滅びた数多くの都市のことについて語られた。そして次のように言われた。

「さてこれらの亡びたる者よりも義しきが故に命を助けられたるすべての者どもよ。われが汝らを医すを得るために、汝らは今われに立ち帰りて罪を悔いまた心を改めざるか。

まことにわれ汝らに告げん。もしわれに来らば永遠の生命を得ん。見よ、われは憐み深き手を汝らに向いて伸べたれば、すべてわれに来る者はわれこれを迎えうる故に幸福なり。」（Ⅲニーファイ9：13，14）

主のみ名によって語る予言者たちを通して、主は今日の人々も同じように招いておられる。この福音は、主がエ

ルサレムで教えられた福音と同じものであり、また、古代のアメリカ人に恵みと祝福を与えるため教会を設立したときに教えられた福音とも同じである。

主の声を聞いた後、大勢のニーファイの民は神殿に集まって、イエス・キリストのことと、彼らが耳にした事柄とについて語り合っていた。するとまた声が聞こえた。「わが喜ぶ愛子を見よ。われはこれに由りてすでにわが名の栄光を示しぬ。わが愛子に聞け。」（Ⅲニーファイ11：7）

彼らが天を仰ぐと、天から白い衣を着たひとりの御方が下ってこられるのが見えた。彼らは自分たちに現われたこの御方を天使であると思っていたところ、この御方は次のように言われた。

「見よ、われはイエス・キリストなり。予言者らがこの世に来ると証をしたるその者なり。

われは世の光にしてまた世の生命なり。」（Ⅲニーファイ11：10，11）

集まっていた人々は全員地に倒れた。すると救い主は、恐れている彼らに祝福を与え、教えを授けられた。それから、ニーファイにバプテスマを施す権能を以てこの民にバプステマを施せ。」（Ⅲニーファイ11：21）

主はまた他の者たちを召して、彼らにもこの権能を授けられた。それは、主のみ名によって儀式を施すためには権能が必要だったからである。さらに主は、バプテスマの儀式を施すときに用いる言葉を教え、また水中に沈める方法で執行するように指示を与えられた。これは末日聖徒イエス・キリスト教会で現在用いられているバプテスマの様式と同じである。主はまた、御自分の説く教義は御父から与えられたものであり、決してそれについて論争してはならないと断言したもうた。そして、12人の弟子に、出て行って、地の果てまで主の言葉を宣べ伝えるように命じられた。

主は彼らに山上の垂訓を与えられたが、これはマタイ伝に記されているものとほとんど同じである。また主は、黄金律を説き、結婚と情欲と不貞に関して教えを授けられた。断食と祈りについても説き、また私たちが主の祈りと呼んでいる偉大な祈りの模範をも示されたのであった。人は神と富とに兼ね仕えることはできない。従ってまず神の王国と神の義とを求めるようにとも教えられた。

主は彼らに多くのたとえ話を語り、救いと昇栄に関するすべての事柄を教えられた。また、御自分の選んだ12人の弟子に特別な指示を与えられた。「汝らはわが弟子にして、ヨセフの家の残れる子孫なるこの民の光なり。

この地は汝らの受けつぐ地にして、御父これを汝らに与えたまえり。」（Ⅲニーファイ15：12，13）

主はニーファイ人に主の言葉を書き留めるよう命じられた。それは、エルサレムの民が聖霊によってニーファイ人や他の部族のことを理解しないときに、これらの記録によって彼らが他の民族のことを知ることができるようにするためであった。これらの記録は、イスラエルの家に福音を説く手段となるものだからである。

主は民が主の言葉を完全には理解していないことを認め、各自の家に帰って主が言われたことをよくよく考えるようにと告げられた。しかし、彼らが涙を流し、もっと長く共にいたいと望んでいることを目にするや、主は彼らをあわれみ、病人やびっこ、盲、不具者を呼び集め、彼らを癒された。主はまた子供たちを連れてこさせ、その真中に立つと、群集に地にひざまずくように命じられた。

「こう言って自らもひざまずいて御父に祈りたもうた。その祈りは書くことができないが群集の中でこれを聞いた者たちは次のように証を立てた。

『私たちが見たり聞いたりしたイエスの御父に対するお祈りは、人の目がまだ見ず、耳がまだ聞かないほど偉大で驚嘆すべきものである。

これを口で言いあらわせる者もなく、筆で書きあらわせる者もなく、また人間の心で想像できぬほど偉大で驚嘆すべきものである。イエスが、私たちのために御父に祈って居りたもうのを聞いたとき、私たちの心に満ちた喜びは人間の想像ができないものである』と。」（Ⅲニーファイ17：15－17）

それからイエスは、「子供たちを一人一人近寄せて祝福を与え、彼らのために祈り、「汝らの子供たちを見よ」と言われた。

「群集がこれを見ようと顔を上げる時、天を仰いで見ると、天が開けて天使らが火の中に取り巻かれているような有様で天降り、子供たちを取りかこんだので子供たちもまた火に取りかこまれ、天使らは子供たちに祝福を与えた。」（Ⅲニーファイ17：23，24）

主は弟子たちに聖餐のパンを与え、次いで群集にそれを与えさせ、こうして民の間に聖餐の儀式を制定された。主はまた、彼らが聖霊を受けたいと願っていることを認め、彼らに聖霊を授けたもうた。さらに主は奇跡を現わし、約束を与え、イザヤの記録とすべての予言者の言葉から主の再臨のしるしについて研究せよと言われた。また来るべき裁きについて警告を与え、什分の一と死者のための業についても教えられた。次いで、主の教会は主のみ名によって呼ばれることを告げ、再び民に悔い改めるよう警告を与えられた。

「さて、世界の隅々に至る者たちよ。汝らは聖霊を受けて聖められ、また終りの日にわが前に罪なしとせられんために今悔い改め、われに来てわが名によりてバプテスマを受けよ。これ汝らに与うる命令なり。」（Ⅲニーファイ27：20）

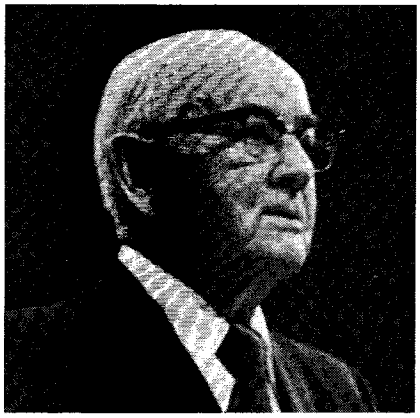
以上の教えはすべて、キリストが復活後ニーファイの民を訪れたときに、彼らに与えられたものである。そして今日、私たちも主の教会において全く同じ教えを受けている。人々がこれらの教えを受け入れてそれに従って生活し、また神を御父とし、その御子イエス・キリストを世の救い主として受け入れるように、私は心から祈っている。スペンサー・W・キンボール大管長を神の予言者として受け入れ、従い、それによって約束された祝福を享受するように祈るものである。イエス・キリストのみ名によって申し上げる。

アーメン。

「わたしを主よ、主よ、と呼びながら、なぜわたしの言うことを行わないのか」

大管長

スペンサー・W・キンボール



この1週間私たちは復活祭を祝ってきた。復活祭おめでとう、と万人に申し上げたい。聖典は主の復活の模様を次のように記している。

「さて、安息日が終って、週の初めの日の明け方に、マグダラのマリヤとほかのマリヤとが、墓を見にきた。

すると、大きな地震が起った。それは主の使が天から下って、そこにきて石をわきへころがし、その上にすわったからである。

その姿はいなずまのように輝き、その衣は雪のように真白であった。

見張りをしていた人たちは、恐ろしさの余り震えあがって、死人のようになった。

この御使は女たちにむかって言った、『恐れることはない。あなたがたが十字架におかかりになったイエスを捜していることは、わたしにわかっているが、

もうここにはおられない。さあ、イエスが納められていた場所をごらんなさい。

そして、急いで行って、弟子たちにこう伝えなさい、「イエスは死人の中からよみがえられた。見よ、あなたがたより先にガリラヤへ行かれる。そこでお会いできるであろう」。あなたがたに、これだけ言っておく』。

そこで女たちは恐れながらも大喜びで、急いで墓を立ち去り、弟子たちに知らせるために走って行った。」（マタイ18：1－7）

「歴史の原点は、ベツレヘムの馬小屋にある。」（ラルフ・ソックマン）

イエス・キリストのみ名とその意味するものは世の歴史の奥底に深く根をおろしており、いかなる時代にもそれが抜き取られることはなかった。キリストは4月6日にこの世に降誕された。神の息子のひとりとして、神の生みたまいし独り子としてキリストが降誕された。この誕生にはこの上ない大きな意味がある。

キリストが導きと教えを施された3年間。その大切さにおいてこの3年間に比肩し得るものは世にない。

そして十字架にかけられる時が来た。イエスは自らの墓を開き、全人類の墓を開くために、死を味わう必要があった。十字架にかけられたあの闇に閉ざされた時なくして、墓より出て来たるという春はなかった。「アダムにあってすべての人が死んでいるのと同じように、キリストにあってすべての人が生かされるのである。」（Ⅰコリント15：22）　今日私たちが喜びを全身にあらわしているのはこのためである。「死は勝利にのまれてしまった。死よ、おまえの勝利は、どこにあるのか。死よ、おまえのとげは、どこにあるのか。」（Ⅰコリント15：55）

11人の使徒たちは、キリストについてオリブ山の頂に登って行った。そこにはふたりの天使がいて、次のように語ったと、聖典は告げている。

「ガリラヤの人たちよ、なぜ天を仰いで立っているのか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになるであろう。」（使徒1：11）

「さて、キリストは死人の中からよみがえったのだと宣べ伝えられているのに、あなたがたの中のある者が、死人の復活などはないと言っているのは、どうしたことか。」（Ⅰコリント15：12）

この大会を通じて、私たちは信仰を新たにし、証を強め、主が正式に任じ権限を与えたもうた僕から主の道を学ぼうとしている。この機会に私たちは交わした誓約と約束、それに決意を今一度心に刻み込もうではないか。

私たち教会員は、水に沈められるバプテスマを受け、聖なる神権を持つ正しい権能を与えられた人の按手により聖霊を受けている。私たちは神の前に自らを低くしてバプテスマを受け、イエス・キリストの教会に迎えられている。私たちはバプテスマを受けることを望み、悔いる精神とへりくだりたる心をもって進み出で、そして教会員の前に証した。すなわち、自分の罪を心から悔い改め、終りまで主に仕えるという固い決意をもってイエス・キリストのみ名を受けると。また、罪の赦しを得させるキリストのみたまを受けたことを、行ないによって表わすと証したのである。

つい先頃、幹部の兄弟たちと共に私はブラジルのサンパウロおよびアルゼンチンのブエノスアイレスで開かれた地域総大会に出席した。私たちはそこに出席した人々に、シオンは南北両アメリカにあると申し上げた。丁度、大きな鷲が翼を広げているように、南北両アメリカともシオンなのである。

南アメリカで教会は大きく進歩し、発展している。人々は幸せそうで、若人は笑いながらダンスを踊っていた。やがて彼らが指導者になるのである。遙かなる国々に住む人々が福音を受け入れ、故国にとどまるときも、「イスラエルの集合」は、成就していることになるのである。メキシコ人にとってのイスラエルの集合はメキシコで行なわれ、北欧に住む人々にとってはスカ

ンジナビア、ドイツ人にとってはドイツ、ポリネシア人は彼らが住む海の島々、ブラジル人はブラジル、アルゼンチン人はアルゼンチンがそれぞれ集合の地である。私たちが、現在350万を数え、なおも成長拡大し、自立の力を強め、さらに忠実の度を強めている民を導くとき、主が助けたもうことに感謝を捧げたい。

今日、19,000人近くの宣教師が福音を宣べ伝えている。「畑は早白くして刈り入れを待っている。」（教義と聖約4：4）宣教師と会員たちが多くの人々に福音を伝えている。

私たちは、地の四隅、地の果てまで宣教師を送っている。そして東西南北、海の島々、いずれの地にもくまなくよきおとずれを携え行くことのできる日が来るのを待ち望んでいる。今やこの教会は世界の教会である。ステーキ部数約700、ワード部および支部 7,500、伝道部は 150を数える。私たちは、いと深き大海で淵がおおわれるように、全地を福音で満たしつつある。

教会は繁栄を見ている。教会員は一般に教えに忠実であり、幸福な生活を営んでいる。最近のこと、東部のある著名人から次のような質問を受けた。「なぜモルモンはこんなに幸せそうなのですか。」私はこう答えた。「私たちはあらゆるものを持っているからです。つまり、イエス・キリストの福音があり、光、神権、権能、約束、誓約、神殿、家族、真理と、すべてがあるからです。」

最近、私たちはワシントンD．C．で壮大な神殿を献堂した。さらに、南アメリカのサンパウロにも神殿を建てることを発表している。

以前、私たちは大会において、主が私たちのためにこの美しい世界を創造し、父祖アダムに地を耕し、人の住居とするよう命じられたことを再確認した。この戒めは今なお生きている。

私たちはすべての人に提案したい。過度の汚染をおさえ、地を手入れし、きれいにし、豊かな産物をもたらす美しいところとするように。主は食物、衣服、家屋、小屋、果樹園、野菜畑、葡萄園など、それらのために地より生じる諸々の草と善きもの、すべてこれら季節に応じて地より生じるものは、皆人のため、人の用いるために造られ、人の目を楽しませ、心をよろこばせるためのものである。これらは肉体をすこやかにし人に活力を与えるよう、食物、衣服、味、香りのために作られた。これらすべてを人に与えることを、神は喜びとしておられる。人はこの目的にかなって適量に用いることを求められている。（教義と聖約59：16－20参照）

だが、家の周囲を見回すと、雑草がはびこり、みぞにはくずや廃物が散らかっており、目をおおうばかりである。破れた囲い、壊れた納屋、傾き、塗料のはげた家畜小屋、壊れた門を見るにつけ、私たちは悲しみを覚える。住居と周辺に今一度目を向けていただきたい。

ブリガム・ヤング大管長にまつわるこのような話がある。ある地域の人々に家屋を手入れし清潔にするよう求めたが、人々はそれをしなかった。このためヤング大管長はその地域を訪れて説教することを拒否し、次のような言葉を述べた。「あなたがたは、家屋を整えるよう求めたにもかかわらず、耳を貸さなかった。扉のちょうつがいは壊れたままで、小屋の塗装ははげており、壊れた囲いも一向に修理されていない。」

ある雑誌に次のような記事があった。

「裏庭には、現在人々が必要としているものをおさえるものがある。インフレをおさえ、世界の食糧危機を緩和するひとつの手段がそこにある。

それは『土地』である。それも、さほど広くなくともかまわない。

使わなくなった遊び場、家屋の裏手の陽の当たる場所、敷地の境にある3メートル位の細長い土地、雑草が伸び放題になっている敷地やキャッチボールに使っている場所で十分である。

食費を削減するには、この土地に野菜を栽培すればよいのである。

手入れを怠らないならば、5×7メートルの土地を使って、6ヵ月間で300ドル（約9万円）に相当する新鮮な作物がとれるという計算になる。

現在多くの人々が庭に菜園を作り、果樹を植え、食品保存用の容器を購入しているという報告を受け、私たちは喜んでいる。このソルトレーク・シティーの職員をはじめとする多くの人々も、わずかな土地を利用して作物を植えている。第二次世界大戦中の家庭菜園が思い起こされる。勧告に耳を傾け、それを実行しているこれらの家族に、賛辞を呈したい。

私たちは今真剣に、教会員に目を向け、倹約を実行して、基本的な日用品を1年分貯蔵するよう教えている。

また聖徒に健康の律法に従って生活するよう教えている。これは、長命と健康という配当を約束するものである。

ある大学の調査によると、「モルモン教会の会員の肺癌と食道癌の発生率は極めて低い」という結果が出ている。モルモンは喫煙と飲酒をしないため、他の人々より健康で知的にもすぐれていると述べている著名な博士もいる。彼は、食道癌とアルコール性飲料の間には密接な因果関係があるとしている学者で、さらにこう述べている。「ユタ州に住む人々は、アメリカ全体と比較して、心臓発作による死亡率が25パーセント低いが、これはタバコを吸わないことによるものであると言うことができる。」

私たちは、この国の多くの地域で報じられている道徳心の低下に戦慄を覚えている。万引と詐欺により損失はこの国だけで数十億ドルにのぼっている。

「あなたは盗んではならない。」（出エジプト20：15）　主はこれをアダムの子孫に告げ、石板に刻み込まれた。両親は、人格を損うこの恐しい行為に陥らないよう子供を教育すべきである。正直は、人々との交際の上でも、自己を修める上でも力ある徳である。嘘言をはく者は、私たちの社会から遠ざけられる。不正直はその様がいかようであれ、「あなたは盗んではならない」に背く最たるものである。

私たちは 350万会員に訴えたい。正直、高潔を守り、入手したものに対して代価を払い、支払っただけのものを受け取るようにしなさい。私たちは子供に正直と徳を教えるべきである。

かけ事はその種類を問わず禁じられている。努力なしに何かを得、無償で何かを得、正当な代価なしに何かを得るということから、人は勝ち負けに関係なく退廃し傷つく。

最近目にしたある雑誌に、アメリカにおける主な犯罪と年間の損害額を一覧表にしたものがあった。賭博による損失がその第1であった。

賭博による損失額は、幻覚剤によるものの5倍、ハイジャックによる損害の20倍以上、横領、詐欺、文書偽造の4倍、窃盗、強盗、万引の10倍以上、破壊、放火の25倍以上、国家、州、地方警察を維持する費用に更生施設およ

び、犯罪を扱う法廷の運営費用を加えたものの2倍以上にものぼっている。

さて、賭博の代価は一体何であろうか。

年間 300億ドル（約9兆円）が消えてゆくのである。

さらに、合衆国のある州では歳入の増加をはかり、宝くじを行なっている。クラブ、宗教団体までもが、賭博ゲームを主催している。

この金額を正しい目的に使うとしたらどんなことができるかを考えてみていただきたい。年間 300億ドルを飢えた人々のために回したら、どんなことができるであろうか。

新聞に目を転じると、女性と十代の若者の喫煙が増加し、女性の肺癌発生率が上昇し始めているという。私たちは傷心に耐えない。肺癌患者の約80パーセントは喫煙者である。だがこれは、問題の一端にすぎない。気腫、気管支系の病気、心臓病は、喫煙と密接な関係がある。これらは、治療に多額の費用を要し、苦痛が大きい。さらに若死にを招く。

主は、1833年に「熱き飲料は体のためにならず」という啓示を与えられた。私たちはこの意味を明らかにする事実を近年得ている。これは茶とコーヒーのことである「タバコは体のためにならず……人間のために良きものにあらず……葡萄酒または強き飲料は宜しからず。また汝らの御父の眼にも適わざるなり。」（教義と聖約89：5－9参照）

主はこれらのものが発見されたとき、喫煙が癌を招き、飲酒が多くの事故と病を招くことを知っておられた。

これは今や全教会員への戒めである。ある教会員がこれら禁じられたものを用いていることを私たちは知っている。だがイエス・キリストはこう宣言しておられる。「わたしを主よ、主よ、と呼びながら、なぜわたしの言うことを行なわないのか。」（ルカ6：46）彼らはこの主の言葉をどう説明するというのだろうか。私たちは、教会員が主の言葉に耳を傾けるよう心から希望している。

さて、ユタ大学のふたりの研究員により、この教会は伝統的に死亡率が低いことが証明された。1971年現在で人口の約72パーセントが教会員であるユタ州は、合衆国で死亡率が最も低い州である。ユタ州の2倍近い死亡率の州がいくつかある。

またこの調査は、飲酒と喫煙に関連して死因となった10の病気のうち、心臓病、癌、肝臓病の3つは、合衆国全体と比較してユタ州の発生率が低いことを明らかにしている。このように、教会員の死亡率は、知恵の言葉と関係があるのである。

さらに、この律法を顧みない人々に尋ねたい。なぜ守らないのか。主の言葉があるのにどうして顧みないのか。

「わたしにむかって『主よ、主よ』と言う者が、みな天国にはいるのではなく、ただ、天にいますわが父の御旨を行う者だけが、はいるのである。

その日には、多くの者が、わたしにむかって『主よ、主よ、わたしたちはあなたの名によって予言したではありませんか。また、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって多くの力あるわざを行ったではありませんか』と言うであろう。

そのとき、わたしは彼らにはっきり、こう言おう、『あなたがたを全く知らない。不法を働く者どもよ、行ってしまえ』。」（マタイ7：21－23）

主の戒めに従って生活していながら、時々あえて戒めを無視すること、これはゆゆしいことである。

天地が創造された後の古えをふり返ってみると、主はエノクにこう言っておられる。「見よ、これら汝の兄弟らを、彼らはわが手に成れる工なり。われ彼らを創りし日に彼らの知識を与え、エデンの園に於て人に彼の自由意志を与えたり。」（モーセ7：32）　これらの禁じられたものを用いることに関して、私たちは友人や世の人々から自由意志を奪おうなどという気持は毛頭ない。けれども主は知恵の言葉を与えたとき、全人類に向かって言われたと、私たちは信じている。

歴史を振り返るに、金の牛や木、石、金属の偶像を拝む人々はそこかしこに見られる。だが、私たちは、過去のいずれの時代にも増して、現代の人々は肉欲という神に頭を垂れ、しかもその数が非常に多いのではないかと思う。心と肉体を破滅に追いやるこの盲目的崇拝は全世界にはびこる恐れがある。私たちは離婚が激増していることを知っている。私たちは離婚を肯定しない。むしろ悲しみを覚えている。離婚が認め

④社会生活

られる場合があるにしても、それが正当とされる例はまれだからである。通常、離婚の原因は夫婦の一方もしくは双方の独善にある。それは醜く、関係者に大きな打撃を与える。損失、悲しみ、孤独、精神的不満をもたらす。特に父母を奪われた子供たちに至っては一層深刻である。離婚を正当化する理由はいくらでもある。私たちの調査によれば、離婚のほとんどは、不貞と、肉欲の神への崇拝がその理由になっている。

このソルトレーク・シティーからさほど離れていないある小さな都市で、341組が結婚し、同時に 272組が離婚したという。全く理解に苦しむ。

夫婦が己れを捨て、互いに献身するならば、主が言われた理想的な結婚に戻ることができるであろう。主は言われた。「この故に、男はその父母を離れてその妻と結び合い二人一体となるべし。」（モーセ３：24）

夫がその妻と交わした誓約に忠実であって、妻に誠意を示し、利己心を捨てるならば、離婚件数は減少の一途をたどることであろう。パウロは次のように命じている。「夫たる者よ。キリストが教会を愛してそのためにご自身をささげられたように、妻を愛しなさい。……それと同じく、夫も自分の妻を、自分のからだように愛さねばならない。自分の妻を愛する者は、自分自身を愛するのである。自分自身を憎んだ者は、いまだかつて、ひとりもいない。」（エペソ５：25，28，29）

そして、妻が偏狭な態度と利己心を捨て、主に自らを捧げるように公正な夫に自らを捧げ、教会がキリストに従うようにその夫に従うならば、離婚率は低下し、さらには家族が成長し、子供の笑い声が聞かれるようになるであろう。神は男と女を創造して、それぞれに特有の才能、力、責任を与え、それぞれ個有の責任を果たす能力を与えられた。

男が家族のもとへ帰り、女は子供たちのために身を献げるとき、本来の夫婦のあり方に戻るのである。女性にとって人生最大の仕事は母親たることである。女性は神と共に働く者であって、女性を除いてそのような影響力を発揮できる立場にいる者はいない。女性は国家の命運をその手に握っている。なぜならば、国民一人一人の人格を形成する責任と機会は女性に与えられているからである。

カリフォルニアのあるステーキ部で、ひとりの母親が次のように話すのを聞いたことがある。「私は女性であることを感謝しています。また妻であり、母親であり、末日聖徒であることを感謝しています。」そのとき私は力強い説教をみた。母親たることは最大の天職である。

出版物や教会の説教を通じて堕胎に対する警告がたびたび発せられている。このイエス・キリストの教会は堕胎に反対している。そして、都合上であれ、罪を隠すためであれ、行なうことも関与することもないよう全会員に勧告が与えられている。

堕胎は、現代の最も忌まわしく罪深い行為のひとつである。寛大さが性的不道徳へと発展している様を私たちは目にしている。生命の基に対して不当に干渉を加えることは、道徳的、精神的、心理的、肉体的に重大な影響を及ぼすと私たちは考えている。妊娠から出産へのいずれの過程であっても、それを妨げることは、神の戒めのうち最も神聖なもののひとつである、「ふえよ、地に満ちよ」（創世１：18）を破ることになる。

堕胎の罪に関与した教会員は、状況に応じて、教会の評議員会により懲戒処分を受けなくてはならない。主はこの時代に十戒を繰り返して述べておられる。「汝盗むなかれ。また、姦淫を犯すなかれ。また、人を殺すなかれ。また何事にてもこれに類することを為すことなかれ。」（教義と聖約59：６）この主の言葉に、十戒と同じものを見ることができる。

私たちは国中にひろまっているポルノグラフィーを容認することはできない。これを制限する法の制度が試みられているが、最善の策はポルノグラフィーに対して家族が防御壁を設けることである。皆様に尋ねたい。「あなた方は善良な民であるのに、この悪習を家庭に持ち込んで、家族や隣人を堕落させたいのか。」

モーセは、煙に包まれ揺れ動くシナイ山からおりてきたとき、さ迷うイスラエルの子らに、行動規範となる十戒を携えてきた。しかし、これらの戒めは何ら目新しいものではなかった。アダムとその子孫は時の初めよりこれらの戒めを与えられ、これらに従って生活するよう命じられていた。従って、主は単にモーセに対して繰り返し言われたにすぎないのである。そして、戒めは、人が地上で生活し始める以前に、天上の会議において現世で人を試みるものの一部として定められたのである。

十戒の第一番目で、人は主を礼拝するよう求められている。そして第四番目で、特に安息日を礼拝の日としている。「あなたはわたしのほかに、なにものをも神としてはならない。……安息日を覚えて、これを聖とせよ。六日のあいだ働いてあなたのすべてのわざをせよ。七日目はあなたの神、主の安息であるから、なんのわざをもしてはならない。」（出エジプト20,8－10）

安息日を守らないことは、天地創造の前に私たち一人一人に対して設けられた試験を通過していないということである。主は試しておられる。「彼らを試し、何にてもあれ、主なる彼らの神の命じたまわんすべてのことを彼らが為すや否やを見ん。」（アブラハム３：25）

私たちは買い物を週日に行なうよう強く勧め、再びこの言葉を投げかけたい。「わたしを主よ、主よ、と呼びながら、なぜわたしの言うことを行わないのか。」（ルカ６：46）

「安息日を覚えて、これを聖とせよ」と言われた主の言葉を、私たちは文字通りに理解し、信じている。

主は正しい社会生活のあり方を定められた。だが世の多くの人々は、特に結婚、性生活、家庭生活についてそれを変えようと努めている。私たちはその意識的に変えようとする努力に戦慄を覚えている。彼らにこの警告を発したい。「賢い人の知恵は滅び、さとい人の知識は隠される。」（イザヤ29：14）

兄弟姉妹の皆さん、あなた方がすべての義務を果たし、戒めに従おうと努めるときに、神の祝福があるように。主に似たものとなるために努力を払っているあなた方に祝福を与える。願わくは、神が、家庭、家族、個々の生活にあってあなたに豊かな恵みを与えたもうように。イエス・キリストのみ名により、祈り奉る。
アーメン。

復活祭に寄せて

第二副管長
マリオン・G・ロムニー

全世界の兄弟姉妹、これから少々の時間私が話す間に主の助けが得られるように願い求めていただきたい。なぜなら、私がこれから話そうとすることは、地上に住むすべての人間にとって重要なものだからである。

復活を記念するこの時節に、今年も復活について多くのことが語られた。復活がどのような意味を持つのかについて完全に理解することはできないにしても、復活が実際にあるのだ、ということについては、心に深く刻み込んでおく必要がある。

パウロはコリント人へ宛てて書いた手紙の中で、復活がイエス・キリストの福音の中枢をなすものであることを暗に示している。

もしわたしたちが、この世の生活でキリストにあって単なる望みをいだいているだけだとすれば、わたしたちは、すべての人の中で最もあわれむべき存在となる。

しかし事実、キリストは眠っている者の初穂として、死人の中からよみがえったのである。

それは、死がひとりの人によってきたのだから、死人の復活もまた、ひとりの人によってこなければならない。

アダムにあってすべての人が死んでいるのと同じように、キリストにあってすべての人が生かされるのである。（Ｉコリント15：19－22）

パウロの手に成るこの偉大な解説を吟味する手始めとして、「死がひとりの人によってきたのだから」という句を取り上げてみよう。「人」とは一体何であろうか。この疑問は時代を越えて人々の口にのぼってきたものである。ヨブは苦しみの中でこう叫ぶ。

人は何者なので、あなたはこれを大きなものとし、これにみ心をとめ、朝ごとに、これを尋ね、絶え間なく、これを試みられるのか。（ヨブ7：17，18）

またこうも書かれている。「人はいかなる者か、どうしてこれは清くありえよう。女から生れた者は、どうして正しくありえよう。」（ヨブ15：14）

これに対して、詩篇の作者はこう呼応する。「人は何者なので、これをみ心にとめられるのですか、人の子は何者なので、これを顧みられるのですか。ただ少しく人を神よりも低く造って、栄えと誉とをこうむらせ（詩篇8：4，5）

この疑問に対して聖典は、明確で力強い解答を与えてくれる。人間は、死すべき骨肉の体を有する、神の子供なのである。これは人間の創造のときに明らかにされた。創世記は、地球と地球に置かれるすべてのものに、霊における創造があったことを告げている。それには人間も含まれており、神は「自分のかたちに人を創造された。すなわち、神のかたちに創造し、男と女とに創造された」のである。（創世1：27）

地にはまだ野の木もなく、また野の草もはえていなかった。主なる神が地に雨を降らせず、また土を耕す人もなかったからである。

しかし地から泉がわきあがって土の全面を潤していた。

主なる神は土のちりで人を造り、命の息をその鼻に吹きいれられた。そこで人は生きた者となった。

主なる神は東の方、エデンに一つの園を設けて、その造った人をそこに置かれた。（創世２：５－８）

これは現代の聖典の言葉と一致する。「而して、人間は霊と体とより成る。」（教義と聖約88：15）

さて、「死がひとりの人によってきたのだから」とあるが、死とは何だろうか。死とは、肉体と霊とが離れることである。

アダムとイブは、生ける霊の結合体として創造されたとき、永遠に生きる能力を与えられていた。彼らは罪がなく純粋で、また徳も高く、神と交わるにふさわしい生活をしていた。実際彼らは、天父なる神との交わりの中で満ち足りた生活を送っていたのである。事実天父はエデンの園にいる彼らのもとを訪れ、言葉を交わし、数々の教えを授けたもうた。この教えは彼らにとって必要なものであった。霊から霊の結合体への変化の過程において、彼らの記憶から過去の出来事がすべて消し去られてしまっていたからである。

主なる神はその人に命じて言われた、「あなたは園のどの木からでも心のままに取って食べてよろしい。

しかし善悪を知る木からは取って食べてはならない。それを取って食べると、きっと死ぬであろう」。（創世２：16，17）

詳細にわたって説明する時間は到底ないが、重大な事実は、アダムとイブが教えに反して禁断の木の実を食べたということである。こうして彼らは自

分の体内に食物を入れ、食物は彼らの体にある変化をもたらした。それは、しかるべき時に人の霊と肉体は分離する、すなわち人は死ぬということであった。

神の戒めを破ったことに対するこの罰は、アダムのすべての子孫に受け継がれた。こうして「死がひとりの人によってきた」のである。（Ｉコリント15：21）

あらゆる人におとずれる死がやって来ると、肉体は地に帰り、霊は霊界へと戻る。

死によって肉体から離れた霊は、不安定な状態に置かれる。このことについてヤコブは次のように記している。

おお大いなる神の智恵よ。その深い憐みと御恵よ。ごらん、もし肉体がもうよみがえらないならば、私たちの霊は必ずあの天使、すなわち永遠の神の御前から堕ちて悪魔となった天使に服従してもうよみがえることは決してない。

そして私たちの霊は必ずあの天使のようになり、私たちは悪魔すなわち悪魔に属する使たちとなって私たちの神の御前から締め出され、あの偽りを生む親と共に、彼自身のように不幸の中に留らなければならない。

従って死からの贖い、すなわち復活は、人間の将来の幸福にとってどうしても必要なものとなるのである。

人は霊なり。元素は永遠なるものにして、分つ能わざる様に結合したる霊と元素とは完き喜びを受く。

この両つのもの、相離るる時人は完き喜びを受くることを得ず。（教義と聖約93：33，34）

さて全知全能の神は、この状態を予見しておられた。アダムが善悪を知る木の実を食べることにより、死が全人類に及ぶことを御存知だったのである。また神は、人間が自らの責任ではないにもかかわらず永遠に死の苦しみを味わうことに対して、不公平であるとも考えておられた。そこで神は、キリストの死と復活を通して贖いの業を行なわれたのである。

主はこの点について、現代の啓示の中でこう語っておられる。

さてわれ誠に汝らに告ぐ。そもそも汝らのために為されたる罪の贖いによりて、死せる者よりの復活は来るなり。

而して、人間は霊と体とより成る。

また死にたる者より復活することは、霊と体とを贖うことなり。

されば、この霊と体との贖いはすべてのものを生かす者によりて来り、地の貧しき者と柔和なる者は地をつぐべしとその生かす者の胸の中に定められたり。（教義と聖約88：14－17）　生かす者とはイエス・キリストである。

さて、イエス・キリストとはだれであろうか、だれひとりとして、また人間が総力を結集してもなし得ない復活をどのようにしてなされたのであろうか。聖典はこれらの質問に答えてくれる。それによると、霊界においてイエスは、私たちと同じように永遠の父なる神の子供であった。この点でイエスは他の人間と変わるところがない。しかしながら異なるのは、私たちがアダムの子孫として死を味わうように定められているのに比べ、キリストの肉体は死に従属することのない、不滅の体を持ちたもう天父なる神から生まれたということである。従ってキリストは、天父から無限に生きる能力を受け継いでおられ、生死を支配する力を持ちたもう。このことはパリサイ人への主御自身の宣言の中に見ることができる。

わたしはよい羊飼である。よい羊飼は、羊のために命を捨てる。

わたしはよい羊飼であって……羊のために命を捨てるのである。

父は、わたしが自分の命を捨てるから、わたしを愛して下さるのである。命を捨てるのは、それを再び得るためである。

だれかが、わたしからそれを取り去るのではない。わたしが、自分からそれを捨てるのである。わたしには、それを捨てる力があり、またそれを受ける力もある。（ヨハネ10：11，14，15，17，18，）

人類が死に支配され、死からよみがえることができないので、イエスが地上に来たまい、アダムの堕落を贖うために自ら進んでその命を捧げられた。復活の力はこうしてもたらされたのである。

主が死に打ち勝たれたことの第一の証拠は、もちろん主御自身の復活である。これが現実の出来事であったことを示す証拠は数多い。マリヤは復活した主の声を聞き、その姿を見た。（ヨハネ20：11－17参照）またイエスがよみがえったことを告げに行くために道を急いでいた女たちにも主は姿を見せ、話しかけられた。そこで「彼らは近寄りイエスのみ足をいだいて拝した。」（マタイ28：9，10参照）また主は、エマオへ向かって歩いていたふたりの弟子と歩みを共にされ、言葉を交わしておられる。（ルカ24：13－16，28：32参照）　使徒には、少なくとも2度は姿を見せたもうた。最初はトマスが不在のとき、そしてその1週間後、今度はトマスがいたときである。主は使徒たちに話しかけ、手足の釘あとをお見せになった。使徒たちは、イエスの求めにより「焼いた魚の一きれをさしあげ」た。すると「イエスはそれを取って、みんなの前で食べられた。」（ルカ24：36－43 ヨハネ20：26－29参照）

さらにイエスはテベリヤの海べで7人の弟子と食事を共にされた。（ヨハネ21：1－22）あるときは一度に500名以上もの人がイエスを目撃している。（Ｉコリント15：6）　また主は「ケパに現れ」、「そののち、ヤコブに現れ」、パウロにも現われた。（Ｉコリント15：5，7，8）さらにガリラヤの山では「11人の弟子たち」に対して、すべての国民に教えを宣べ伝えるように命じておられる。（マタイ28：16－20）

最後に「イエスは彼らをベタニヤの近くまで連れて行き、手をあげて彼らを祝福された。祝福しておられるうちに、彼らを離れて、〔天にあげられた〕。（ルカ24：50，51）

主は復活の後にエルサレムで導きと教えを施されたが、それを終えるとアメリカ大陸のニーファイ人のもとを訪れ、恵みを施しておられる。

イエスの復活の記録は驚異と霊感に満ちている。と同時に重要なのは、イエスによりもたらされた復活の力が全人類に及ぶという確信を得られたことである。これは主の約束である。

マタイはこう記録している。「また墓が開け、眠っている多くの聖徒たち

の死体が生き返った。」(マタイ27：52，53)

イエス御自身も、死すべき肉体を持って伝道しておられたとき、こう語られた。「墓の中にいる者たちがみな神の子の声を聞き、善をおこなった人々は、義人の復活のときによみがえり、悪をおこなった人々は、不義なる者の復活のときによみがえって、それぞれ出てくる時が来るであろう。」(霊感訳ヨハネ5：28，29)

主は復活後にアメリカ大陸で伝道しておられたとき、この重大な真理である全人類の救いについて強調するため、他の人々の復活に関するサムエルの予言とその成就を記録の中に入れるように指示された。当然記録されているはずのものをニーファイ人の弟子たちが忘れていたのである。それは主の十字架上の死のひとつのしるしとしてニーファイ人に与えられたもので、「多くの聖徒はよみがえって多くの人々に現われる」というものである。(ヒラマン14：25)

ニーファイ人の弟子はこう語っている。「主よ、サムエルは今主が仰せになりたる通り予言して、その予言はすでにみな事実になれり。」(Ⅲニーファイ23：10)

黙示者ヨハネは、福千年の開始と時を同じくして起こる復活の示現を、次の言葉で結んでいる。これはもはや遠い将来のことではない。

> ……彼らは生きかえって、キリストと共に千年の間、支配した。
> それ以外の死人は、千年の期間が終るまで生きかえらなかった。(黙示20：4，5)

また、次のようにつけ加えている。

> また、死んでいた者が、大いなる者も小さき者も共に、御座の前に立っているのが見えた……
> 海はその中にいる死人を出し、死も黄泉もその中にいる死人を出し、そして、おのおのそのしわざに応じて、さばきを受けた。(黙示20：12，13)

アミュレクはゼーズロムにこう語っている。

世には肉体の死と名づける死があるが、キリストの死によって肉体の死の縄目が解かれあらゆる人がこの肉体の死から復活することができる。

ここに於て霊と体とは再び合して完全な形となり、手足も骨の関節も私たちが今持っている本来の形に返り……

この復活はあらゆる人が全部受けるのであって、老若男女の区別なく悪人と善人とを問わず、奴隷と自由人とのへだてなく……完全な形にかえるのである。(アルマ11：42－44)

このようにして、パウロの次の宣言は成就するのである。

> それは、死がひとりの人によってきたのだから、死人の復活もまた、ひとりの人によってこなければならない。
> アダムにあってすべての人が死んでいるのと同じように、キリストにあってすべての人が生かされるのである。
> ただ、各自はそれぞれの順序に従わねばならない。最初はキリスト、次に、主の来臨に際してキリストに属する者たち、(Ⅰコリント15：21－23)

このようにして人間は不死不滅の体を受けることができるようになり、主は、「人に不死不滅と永遠の生命をもたらす」という「主の業」のうち、最初の部分を終えられたのであった。(モーセ1：39)

復活について、私たちはいかに多くのものを贖い主に負っていることだろう。しかしこれが最終目標ではない。不死不滅の体を得ることは、永遠の生命を得るために欠かすことのできないひとつの資格条件なのである。不死不滅とは死を味わわないという意味で、言わば時の長さを表わすのに対し、永遠の生命は、受ける生命の質を問題にした言葉であり、神御自身が享受しておられる生活のことを表わしている。

来たるべき世には、栄光の階級の異なる3つの王国がある。星――最も低い光栄、月――中間、日――神御自身が享受しておられる光栄の3つである。これらの王国は、それぞれひとつの律法によって支配される。

人は霊界において裁きを受け、その働きに応じて報いを受ける。復活のときにその体は、王国の栄光と彼らがこの死すべき世において従ってきた律法とによってよみがえるのである。(教義と聖約88：17－32参照)

イエス・キリストの福音は、アダムから時の絶頂に至るまでの予言者に啓示され、彼らを通して教えられてきた。またイエスがこの地上で伝道しておられたときに教え、実践されたのもこの福音であった。さらに、この時満ちたる神権時代に回復されたのは、まさしくイエス・キリストの福音である。この福音は今、末日聖徒イエス・キリスト教会が、正しい権能の下に全世界にわたって教え、福音の諸儀式を執行している。これはまさしく、死すべき肉体を有する人間に適用される、日の光栄の律法なのである。

日の光栄の体を得て復活するためには、この律法に従うことが前提となる。これを得た者の栄光はいかに大きく、また得られなかった者の悲しみもいかに大きいことか。予言者ジョセフ・スミスは、ある葬儀の席上、次のように語った。「復活のときに希望や期待がくじかれるとしたら、それは筆舌に尽くし難いほど恐ろしいことである。」(History of the Church「教会歴史」6：51)

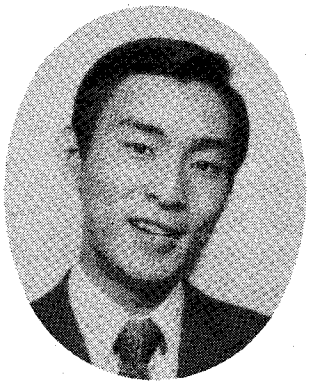
この律法については、この大会において再三にわたって取り上げられ、論じられてきた。これからはさらにその機会が多くなることであろう。よく耳を傾け、従うようにしていただきたい。

この話を結ぶにあたり、私は、今まで話してきたことが真実であると証したい。イエスが生きておられ、神の御子であり、神の生みたまいし独り子としてこの地上に来られたこと、そして死に打ち勝ち、墓からよみがえり、全人類のために復活の力を得られたことを、私は聖きみたまを通して知った。

ゲッセマネの園や十字架上での主の苦難は、私たちに悔改めてキリストの福音に心から従うことにより、不死不滅はおろか永遠の生命をも得る手段を与えてくれた。これこそ神の賜の中で最も偉大なものである。このことをイエス・キリストの聖なるみ名により厳粛に証申し上げる。

アーメン。

私たちは結婚の前に



福岡支部
吉村信之

お互いに主のみこころを求めて

主よみむねのまま言わん、みむねにそいまさん……

このままでよいのだろうか、自分には人生に必要な多くのものが欠けている。どうしたら充実した毎日を送れるのだろうか、正しい意味のある生き方をしたい、清くなりたい。そしてそのためには、何か頼ることのできる真実で力強いものが欲しい……。このような思いが、私の心の大部分を支配していた今から4年前の1月のある日、私は1枚のパンフレットと手紙をたよりに、この真の教会の門をくぐったのです。

当時大学生であった私はすぐにバプテスマを受け、教会のすべてのものに自分が調和してゆくのを嬉しく感じ、いろいろな集会に欠かさず参加し、責任を一生懸命に果たしました。そんなある日、まだ会員になって一年も経っていない頃、ひとりの素晴らしい姉妹と親しくなる機会を得、そしてこのことが、それからの私の信仰生活に大きな影響を与え続けてきたのです。彼女と最初に逢った時、この人とはいつまでも信仰の友であり、兄妹でいたいと望んだのを今でも同じ気持で思い出すことができます。それからふたりはいつも助け合い、励まし合い、高め合って、良い末日聖徒であるよう努力してきました。ふたりはいつの間にか結婚の約束をし、主のみこころを求めて将来のために準備するようになっていました。

数年が経ち、ふたりが目標としていた日まであと数ヵ月と迫り、多くの障害を経、いくつかの問題を残しながらもそれは実現するかのように思われました。

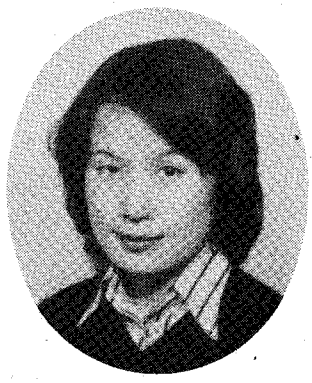
しかし、このときの私の意志に反してこの計画を阻むひとつのささやきがありました。「伝道に出るべきなのでは？」　この気持はこの時というよりはむしろ最初からあったものですが、実行に踏み切るにはあまりに大きすぎる障害や反対、そして逆に結婚に対する期待は常にこの考えを打ち消すのに十分でした。しかし、主のみこころのままにと考え、結婚を準備すればするほどこのささやきは私の心を捉え、私にはどうしてよいかわからなくなってしまいました。

私はこのことについて心から祈り、主の導きを求めました。その結果伝道部長のアドバイスも受け、ついに伝道に出ることを決心したとき、私の心は霧の晴れた空のようにすがすがしく、また内には暖かいものを感じ、まるでその答えは前から知っていたように思えたほどでした。また不思議なくらい今まで感じていた多くの障害に対する不安は消えて行ったのです。このことを姉妹に話すと、驚いてはいましたが、主のみこころを求めていた彼女は迷うことなく同意し、ふたりとも伝道に出る決心をしました。

それから一つ一つのことが、「……何事も結局は好都合となるべし」という主の言葉通りになり、地方部宣教師として召され働いている今、大きな祝福と喜びを感じ、みこころによって専任宣教師に召されるよう、毎日を準備しています。この教会が真の教会でなく、主が生きておられず、また聖霊の導きがないとしたら、どうして私にこのようなことができるでしょうか。これは私の証です。この喜びのおとずれを多くの人に知っていただきたいのです。

主よみむねにそいまさん。　　イエス・キリストの御名により証します。アーメン。

伝道を決心しました



福岡支部
太田みどり

福音を述べ伝える使命と喜びに

私が最初にこの末日聖徒イエス・キリスト教会を知ったのは、5年前に東京でモルモン経を買ったときでした。そのとき売って下さった姉妹が「この本を読めば素晴らしいということがわかります」と言われた言葉を今でも覚えています。主の導きによりこの教会を知ることができたことも心から感謝しています。

この教会を知る前、子供の頃から他のキリスト教会の会員でした。高校に通い出した頃から自分の信仰や教会に対して疑問を感じ始め、どこか他の教会に行ってみようと思いましたが、人の作った教会しかないのだと感じ、どこに行けば良いのかわかりませんでした。しかし5年前にモルモン経を買ってから、それまでの疑問や不安はなくなりました。宣教師から回復のメッセージを聞いたとき、探していたのはこれだと思い、天父に心から感謝しました。それから4年間、聖典を読み、福音の勉強をし、祈り、集会に出席することによって、毎年毎年、教会に対しての確信は強くなっています。

教会に入って半年たったとき、私は素晴らしい神権者を知ることができました。そして私たちはお互いに大学を卒業したら結婚しようと約束しました。私は地方部の役員として兄弟は地方部、そして伝道部の役員として、多くのことを学び、経験し、素晴らしい地上の王国を作りたいと話し合いました。共に勉強し、断食して祈りました。しかしそのときは結婚するという強い確信を得ることはできなかったように思います。それがなぜだったのかは後でわかりました。

お互いの家族に紹介し、結婚することを進めていたある日のこと、兄弟がこう言いました。「伝道に出よう」と。それまで結婚することだけを考えて準備していたにもかかわらず私はすぐに「そうしましょう」と言ったのです。躊躇なくそう言った自分が不思議でしたが、「伝道に出よう」という言葉は、とても新鮮なことのように感じ、はっとさせられました。伝道に出る決心をして、断食して祈ったとき、これまで感じたことのないような強いみたまを感じ、伝道に出ることが正しいことだとわかりました。そしてそのとき、私が回復のメッセージを宣教師から聞いたときに心に感じていたことを思い出しました。それは、この素晴らしいメッセージを他の人々に伝えたいという事です。私は結婚する前に伝道に出る決心ができたことを感謝しています。この永遠の道を歩む途中に、1年半の間神様のために働くことは、短いことだと思います。今、私と兄弟は地方部宣教師として、伝道に出るまで準備しています。今まで味わうことのできなかった喜びを感じています。それは福音を述べ伝える喜びです。教会の代表として証する喜びです。この教会は確かに、イエス・キリスト教会です。主は私たち一人一人を愛していらっしゃり、生ける予言者スペンサー・W・キンボール大管長を通して導いておられることを証します。また主が生きていらっしゃること、ジョセフ・スミスが天父と御子イエス・キリストに会い教会を回復したことを証します。私たちは、この素晴らしい事実を述べ伝える使命があると思います。イエス・キリストのみ名によって証致します。アーメン。

わが家の改宗

▲服部家族

▲木崎家族

家族の良き道しるべになりたい

奈良支部　服部　大

バプテスマを受けてから早や5ヶ月目を迎えモルモン家族として新しい歯車が回転し始めました。以前は結婚する前からモルモンだった妻が、子供達を連れて教会に出席していたのですが、今は私が率先して朝からの神権会等すべての集会に全員で出席するように変わりました。妻はこの姿を夢見て、神様にいつも私を導いて下さるようにと祈っていたとのことです。本当に神様は不思議なことをなさるものです。今まで無信仰だった私をこのように変えてしまったのですから。

以前、私は神というものを信じませんでした。なぜなら人間が皆平等のはずなのに、私自身父を戦争で失い、顔も知らず、父と呼ぶこともなく母ひとりに育てられましたし、また私より不幸な目の見えぬ人、手足の不自由な人、口のきけぬ人等、神はなぜ人々に差をつけるのか神がいるならこんなことはしないだろうという根拠から来たものでした。しかし宣教師のレッスンを受け愛と助けにより私の不信は一つ一つ解き明かされてだんだんモルモンに興味を持つようになり信仰を持つに至りました。そして最後に、ある宣教師のひとつの言葉が私にバプテスマを決意させました。

それは、「あなたは家族の長として子供たちに良い模範を示して家族の予言者になりなさい」という言葉でした。私は子供に対して何の模範も示していないし、また毎日の仕事に追われ、土曜日には徹夜マージャン、あげくのはて日曜日には一日その疲れをいやす日でしかなくほんとうに毎日毎日を無意味に過ごしてきたことに気づきました。そして8月30日、バプテスマを受けて、今は神権をいただき、祝福を受けています。しかし思いますに、特にめぐまれたのは子供たちの灌油の儀式にたびたび出席して神の力を知り、また妻の友人の結婚式に出席しその帰りに伝道部長さんの家族に接する機会に恵まれたことでしょう。モルモンである妻と結び合わされたことで、その中で自分の信仰といえるものが少しずつ芽ばえていったのではないかと思うのです。

「信仰とは完全に物事を知ることではない。……まだ見ていない本当のことを待ち望む」（アルマ32：21）だから主イエス・キリストを信じる信仰を強く持ち3人の子供を育てる今、子供のためにも良い模範を示し、福音の律法と儀式を守ることにより今の幸福を永遠の幸福へと導いて下さることを望みたいと思います。そしてモルモンの家族としてこれから先子供たちには良き道しるべとなりまた永遠の結婚の儀式を受けられるよう、末長く信仰を持ち続けたいと思っています。

今、少しでも証を持つことができますことを心から感謝しています。

宣教師の働きに共感

堺支部　木崎　正之

須古星兄弟より、「宣教師との出合いから改宗（私たちにとっては改めるべき宗といったものは全然ありませんでしたが）に至る経過というか心の動きといったものを、伝道の参考にしたいから書いて下さいませんか」とのことですので正直なところ書いてみます。

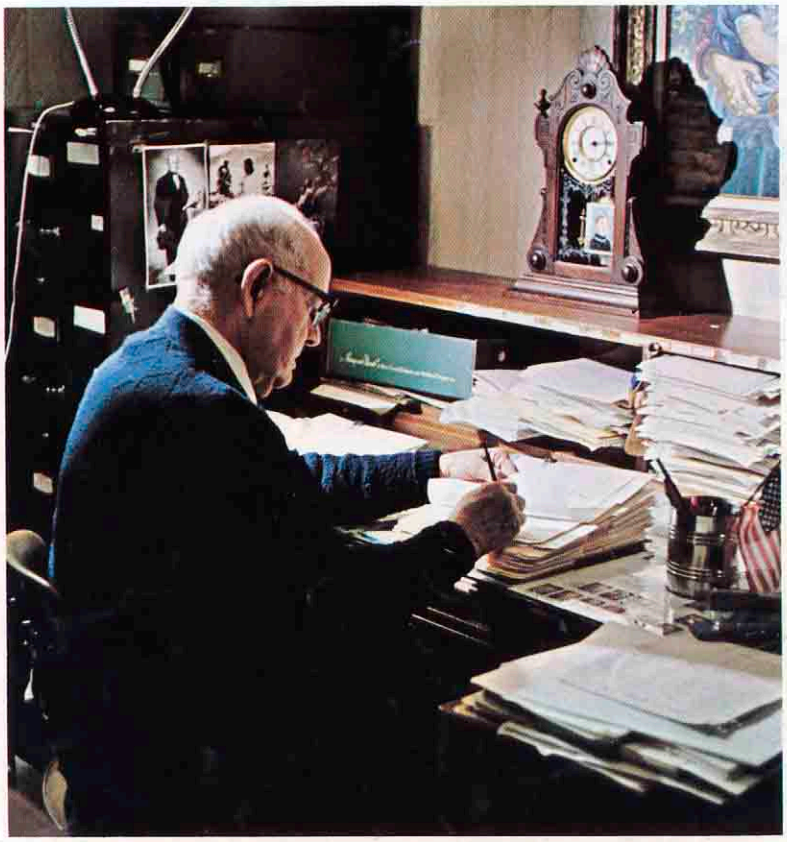
まず私たちの自己紹介の必要があると思います。私は37歳、妻は35歳、9歳と8歳と4歳の息子が3人の5人家族です。私の職業は損保会社の外交員です。この仕事は満3年経ったところです。双方の両親も元気ですし、おかげで今まで何のトラブルもなく、まあ恵まれた幸せな人生だったと思っております。性格的にはふたりとも楽天的というか、のんき者というか、生活も質素ですし世間体もあまり気にならない、マイペースのマイホーム主義者といったところです。こんな自分に変な自信を持って満足しています。私の唯一の趣味というか道楽として旅があります。高校生のときから大学にかけて、日本国内は大袈裟に言えば、隅から隅まで歩きましたし、主な山も登りました。もちろん1人旅です。でもこの時期には信仰といったものは何も感じませんでした。しかし父と一緒にしていた自転車部品の商売を廃業（住いが堺市綾之町から南三国丘に移ったため）した46年に半年間、念願の海外も出歩き、一応ヨーロッパからアメリカ、又、東南アジアの各国もゆっくりまわる機会がありました。この時は仕事も無く、おまけに日本を外からみつめるという、私にとっては色々考えることの多かった旅になりました。経済の急成長も公害も多数の日本人がその生活や物の考え方に信仰心といったものがあまりにも欠けているからではないのかといったこともそのひとつでした。昨年はネパールからインドへ旅しましたが、このときは宗教というものについてとにかく強烈な印象を得ました。ヨーロッパや東南アジアとは別の意味で。このような訳で、私としても「我家に全く信仰といったもののカケラも無いということは子供達にとっても良くないことだ」という気持は持っていた訳です。

昨年10月はじめ宣教師が我家に来られました。まずはじめは一体何を言うのか非常に関心がありました。私も常日頃、自転車で走っている二人組をよく見かけましたし、堺東あたりでの活動から、「若いのに異国に来て感心なものだ。いったいどんな宗教なのだろうか？」といった感じを持っていましたので、「あなたにとって家庭とは」というパンフレットに基づくレッスンにまず共感を持ちました。しかし私は（宣教師が思っていたよりずっと日本語が上手なのに安心して）宣教師そのものに大変興味を持ちましたので、彼ら自身のことについて色々と質問し、その答えに本当に感心しました。私のいままでの若者観やアメリカ観からはとても考えられない人たちだったのです。子供達もまた、にこやかな宣教師の訪れを大変喜びました。しかし、ジョセフ・スミス、神、イエス・キリスト、本当の教会、証、祈りといったことばに対しては、そんなものかな、そういうお話なのかといった感じしか持てませんでした。「ジョセフ・スミスの証」とか「救いの計画」といったパンフレットはどうもピンと来なかったのです。しかし「父よあなたは正しい道を歩んでいるか」「堅固な家庭」「女性の役割」などは全く共感しましたし、「知恵の言葉」については、私自身、酒、タバコに関しては以前から自分から欲しいものではありませんでしたし、「なぜ清くあるべきか」も本当にそうあるべきだと思いました。（私の場合は残念ながらそうではありませんでしたが、）「什分の1のおきて」についてはその10%という数字にびっくりしましたが、しかし「おきて」としての什分の1ということよりも組織の資金としての観点からの方が私には理解できました。11月の中ば頃までは、とにかく私たちにはまず「日曜日教会へ行く」ということが今までの生活習慣からとても守れそうもないから教会員になるなど考えない方が良い、などと宣教師が帰って子供が寝てから私たちふたりでよく話し込んだものでした。しかし一方で私自身も家族も、今までのことをふり返ってみたとき、本当に何かに感謝しなければならないような気持が強くありました。ただ「幸運だった」だけではいけないという気持が。ちょうどその頃、ハンブリン長老が阿倍野へ転勤となり、はじめからのレイ長老の同僚として京都からシェリー長老が来ました。

シェリー長老とはレッスンというより、私たちも本当の話合いができました。この21歳の若者もモルモンの宣教師としての自覚からその力を出しているのだということがよく解りました。とにかく我家には数えてみると8人の宣教師が来られましたが、私たちは必ずそれぞれの家族のことを聞き、その夢に満ちた家庭の雰囲気を知ることができました。私たちの家庭も息子が成年になっても、それぞれ独立してからもこの人たちのような家庭に！という気持が非常に強いものになりました。しかし「バプテスマを……」と言われてみると、私たちも宣教師ではない堺の教会の人々、日本人の教会員の人々がはたして一体どんな人々なのかといったことがまた大変な問題となってきました。とにかく教会へ行ってみようということで、12月の第一週より出席しました。ちょうど私の少し知っている方がおられ、あの御夫婦が教会員ならとの安心感をまず持つことができたのも本当に幸運だったと思います。

12月28日。私たち家族にとっては本当に感激の日となりました。4歳の智之が自分だけ家族から離されていたのが不満だったでしょうが。レイ長老、シェリー長老、久しぶりに再会したハンブリン長老はじめ宣教師、それに堺の教会員の方々の愛と祝福を感じ、こみあげてくるものをどうしようもありませんでした。人生の目的が解った様な気がします。これが実感です。しかし私たちも、これから教会員として聖典、福音についてよく学びまず我家をより愛と祝福に満たされた家庭にしたいと思っています。

私たち家族を末日聖徒イエス・キリスト教会の会員として迎え入れてもらえましたことを本当に感謝しております。

聖 徒 の 道

1975年 8 月20日発行（毎月 1 回20日発行）　第19巻第 8 号
昭和42年12月18日第 3 種郵便物認可